氷見市埋蔵文化財調査報告第16冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

１９９３年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９４年３月

氷見市埋蔵文化財調査報告第16冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

１９９３年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９４年３月

序

富山湾に面し海の幸，山の幸に恵まれた氷見市は，古くより人々の生活の場として，数多くの文化遺産を育み，守ってきました。

特に，大正７年に調査された大境洞窟は，日本で最初の洞窟遺跡調査として，同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として，学史にその名を留め，国指定史跡になっております。

しかしながら，近年，生活の豊かさ，利便さを求めて開発が進められる一方で，これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては，文化遺産保護のため，市内全域の詳細分布調査を実施することにより，より充実した遺跡地図を作成することにいたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは，真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに，調査の実施及び報告書の作成にあたり，ご協力いただきました地元の方々，またご援助いただきました富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

氷見市教育委員会

教育長　江　幡　　武

例　言

1　本書は，富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第1年度（1993年度）の，報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，氷見市教育委員会生涯教育課学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して，行った。

4　本文は，宇野隆夫（富山大学人文学部教授），前川要（富山大学人文学部助教授），大野究，鈴木和子・大泰司統・大高政史（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付して示した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。

7　採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保管公開している。

8　編集は宇野隆夫・前川要・大野究の指導の下に鈴木和子がおこなった。

目　　次

第1章　はじめに …… 1
1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　氷見市の地勢と自然環境 …… 2
4　1993年度調査区の地勢と地区割 …… 4

第2章　分布調査の成果 …… 7
1　遺跡と採集遺物 …… 7

(1) 十二町津野遺跡 …… 7
(2) 荒館ソモギ遺跡 …… 7
(3) 荒館B遺跡 …… 7
(4) 十二町潟排水機場遺跡 …… 8
(5) 坂津遺跡 …… 9
(6) 坂津横穴群 …… 9
(7) 窪北遺跡 …… 9
(8) 松田江北遺跡 …… 11
(9) 窪シムラ遺跡 …… 11
(10) 柳田南遺跡 …… 12
(11) 柳田茨木遺跡 …… 12
(12) 柳田布尾山遺跡 …… 12
(13) 柳田沖宮遺跡 …… 13
(14) 園長堤遺跡 …… 13
(15) 島尾北遺跡 …… 13
(16) 堀田サカイ遺跡 …… 13
(17) 柳田遺跡 …… 14
(18) 島尾遺跡 …… 15
(19) 上泉遺跡 …… 16
(20) 上泉西遺跡 …… 16
(21) 大浦深素遺跡 …… 16
(22) 馬乗山遺跡 …… 16
(23) 園カンデ窯跡・製鉄遺跡 …… 16
(24) 大浦遺跡 …… 19
(25) 堀田竹端遺跡 …… 19
(26) 四十塚遺跡 …… 19
(27) 多胡城跡 …… 20
(28) 堀田大久前遺跡 …… 20
(29) 堀田ナンマイダ松古墳 …… 21
(30) 堀田東谷内遺跡 …… 21
(31) 堀田ガス山遺跡 …… 21
(32) 堀田館ノ山塚遺跡 …… 21
(33) 田子遺跡 …… 21
(34) 小竹山城跡 …… 21
(35) その他の採集遺物 …… 22
(36) 住吉神社境内の石造物 …… 22
(37) 日宮神社付近の石造物 …… 23
(38)～(41) その他の遺跡 …… 23

2　遺物の散布状態 …… 24

(1) 縄紋時代遺物の散布状態 …… 24
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態 … 24
(3) 古代遺物の散布状態 …… 24
(4) 中世遺物の散布状態 …… 31
(5) 近世遺物の散布状態 …… 31
(6) 小結 …… 31

第3章　おわりに …… 33
参考文献 …… 35

図 版 目 次

関連頁

図版 1　A地区航空写真(1)…… 1947年撮影…… 1 ～ 4
図版 2　A地区航空写真(2)…… 1992年撮影…… 1 ～ 4
図版 3　遺物実測図(1)…… 大泰司作成…… 7 ～25
図版 4　遺物実測図(2)…… 大高作成…… 7 ～25
図版 5　五輪塔実測図……大泰司作成……24
図版 6　遺物写真(1)…… 前川・鈴木・大泰司・大高撮影…… 7 ～25
図版 7　遺物写真(2)…… 前川・鈴木・大泰司・大高撮影…… 7 ～25
図版 8　遺物写真(3)…… 前川・鈴木・大泰司・大高撮影…… 7 ～25
図版 9　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅰ …… 大高作成…… 7 ～25
図版10　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅱ …… 大高作成…… 7 ～25
図版11　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅲ …… 大高作成…… 7 ～25
図版12　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅳ …… 大高作成…… 7 ～25
図版13　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅴ …… 大高作成…… 7 ～25
図版14　A地区の遺跡と遺物採集地点Ⅵ …… 大高作成…… 7 ～25

挿 図 目 次

第 1 図　氷見市の地勢と地区割……大泰司作成…… 3
第 2 図　A地区図……大泰司作成…… 5
第 3 図　A地区の地区割……大泰司作成…… 6
第 4 図　園カンデ窯採集遺物実測図……大泰司作成……17
第 5 図　A地区の地形……大泰司作成……25
第 6 図　A地区縄紋時代遺物の散布状態……大泰司作成……26
第 7 図　A地区弥生・古墳時代遺物の散布状態……大泰司作成……27
第 8 図　A地区古代遺物の散布状態……大泰司作成……28
第 9 図　A地区中世遺物の散布状態……大泰司作成……29
第10図　A地区近世遺物の散布状態……大泰司作成……30
第11図　A地区の遺跡の位置……大泰司作成……32

第1章　はじめに

1　調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約1万年前，上庄川上流域の丘陵においてである。以後，遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いたものと思われる。

氷見市の遺跡の数は，大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後，昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83個所，昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143個所と，年々増加してきている。

しかし，これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく，その範囲・時期などについて不明な点が多く，また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2　調査の経過

このような状況のもと，氷見市では平成4年度からスタートする第6次総合計画の主要施設のひとつとして，「指定文化財の再調査はもとより，指定以外の文化財，埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め，活力ある文化財として，郷土の歴史的遺産の保護・顕彰を図る」ことをあげ，主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では，平成4年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図』［第2版］を発行し，234個所の遺跡を登録した。

さらに平成5年度からは，この遺跡地図をさらに充実させるため，国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては，氷見市教育委員会を中心とし，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て，下記の調査団を編成した。

調査の方針としては，市域の平野部全体を調査対象とし，7個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し，最終的にはより充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は，A地区について（第1図），1993年11月7日～12月12日までの間，計7日間，延170人余の参加を得て，実施した。

氷見市埋蔵文化財分布調査団

団　　長：江幡　武（氷見市教育委員会教育長）

調 査 員：宇野　隆夫（富山大学人文学部教授）

前川　要（富山大学人文学部助教授）

大野　究（氷見市立博物館・氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

鈴木　瑞麿（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員：高橋　浩二・鈴木　和子（富山大学大学院人文科学研究科学生）

角田　隆志・大知　正枝・小野木　学・海道　順子・柳原　滋高・島崎　久恵

中村　大介・長谷川幸志・松田　留美・松山　温代・宮田　明・柳沼　弥生

大野　淳也・野川　裕二・大泰司　統・大高　政史・大平　愛子・尾野寺克実

河合　忍・佐藤　聖子・武田　昌明・中田　書矢・野中由希子・福海　貴子

松原　和也・鵜松　誉（富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：石内　詩保・稲石　純子・岩崎　誉尋・内田亜紀子・大川　進・大平奈央子

景山　和也・近藤　美紀・匂坂　友秋・塩田　明弘・滝　寿美代・坪田　聡子

古沢亜希子・堀内　大介・三林　健一・米出　敬子

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

事 務 局：玄　義昭（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

山岸　啓次（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）

西井　紀夫（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

浦　勇仁（氷見市教育委員会生涯学習課社会教育主事）

高野　弘文（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

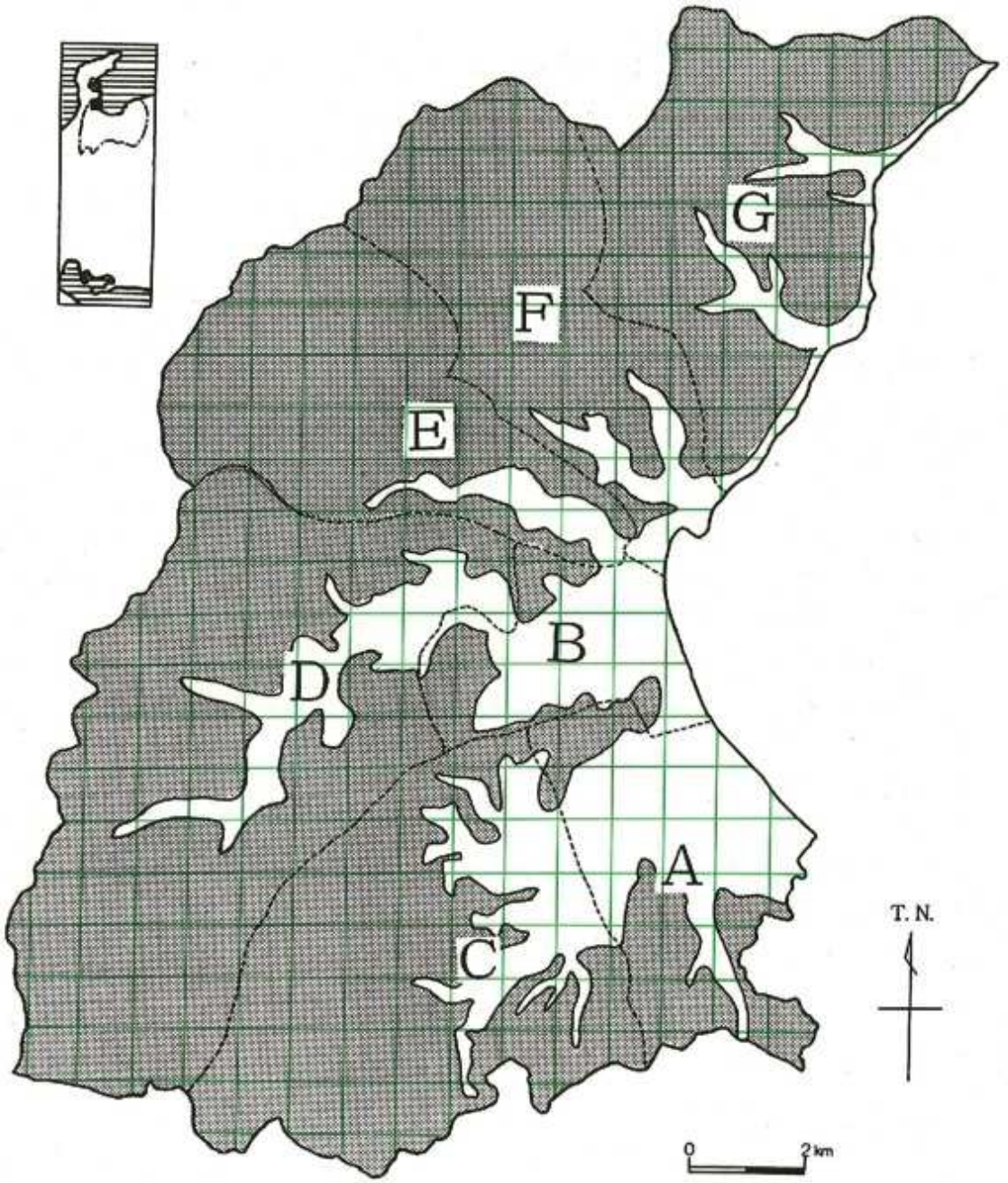
宮下　和子（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

3　氷見市の地勢と自然環境

氷見市は，富山県の西北部に位置し，能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに，太田村を除く氷見郡１町17村が合併し，現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢，人口は約６万１千人である（第1図）。

市域は，北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ，東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り，山間部では地すべりが多い。市北半部は，上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川などの小河川とその支流からなる谷地形であり，上庄川流域以外は，まとまった平野が少ない。市南半部は，かつてラグーンであった平野と，その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は，海岸線のほぼ中央に位置し，近年は北と南に広がりつつある。鉄道では，氷見と高岡を結ぶＪＲ氷見線が通り，主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と，



A地区	1993年度調査地区	E地区	1997年度調査予定地区
B地区	1994年度調査予定地区	F地区	1998年度調査予定地区
C地区	1995年度調査予定地区	G地区	1999年度調査予定地区
D地区	1996年度調査予定地区		

第1図　氷見市の地勢と地区割

（国土座標　X＝138°59′55″　Y＝35°48′を基準として）

富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は，稲作を中心とした農業と，ブリ定置網に代表される漁業であったが，近年は第２・３次産業就職者が多く，高岡市などの市外へ通勤する人も多い。

一方，能登半島への観光ルートとして，市内には旅館・民宿が建ち並び，近年は温泉も噴出している。

４　１９９３年度調査区の地勢と地区割

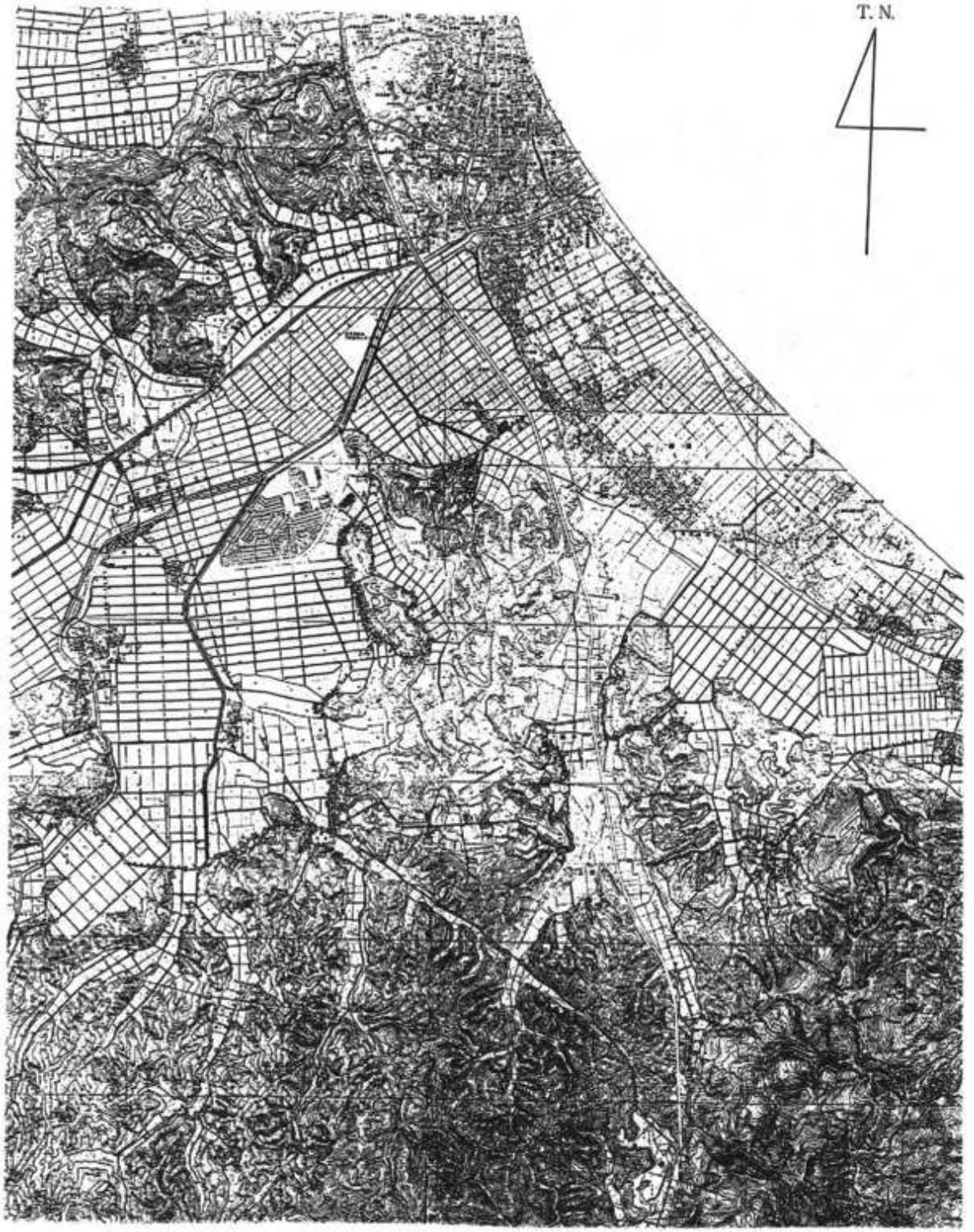
今回の調査地区は，市東南部の砂丘部分と，旧潟の平野のうち氷見広域農道の東側部分である。調査は踏査によるものとし，対象は平野部と丘陵部の農地とした(図版1･2)。

砂丘部分は，現在主として畑地として利用され，市街地に近い北側は徐々に宅地化が進んでいる。氷見市でも今後開発が盛んになると予測される地域である一方，遺跡では弥生時代の柳田遺跡などがわずかに周知されるのみで，空白に近い地域である。近年考古学では潟が港として果たした役割が注目され，全国各地で砂嘴上の重要な遺跡の発見が相次いでいる。従ってこの地区では未知の遺跡の存在が予測され，成果が注目される。

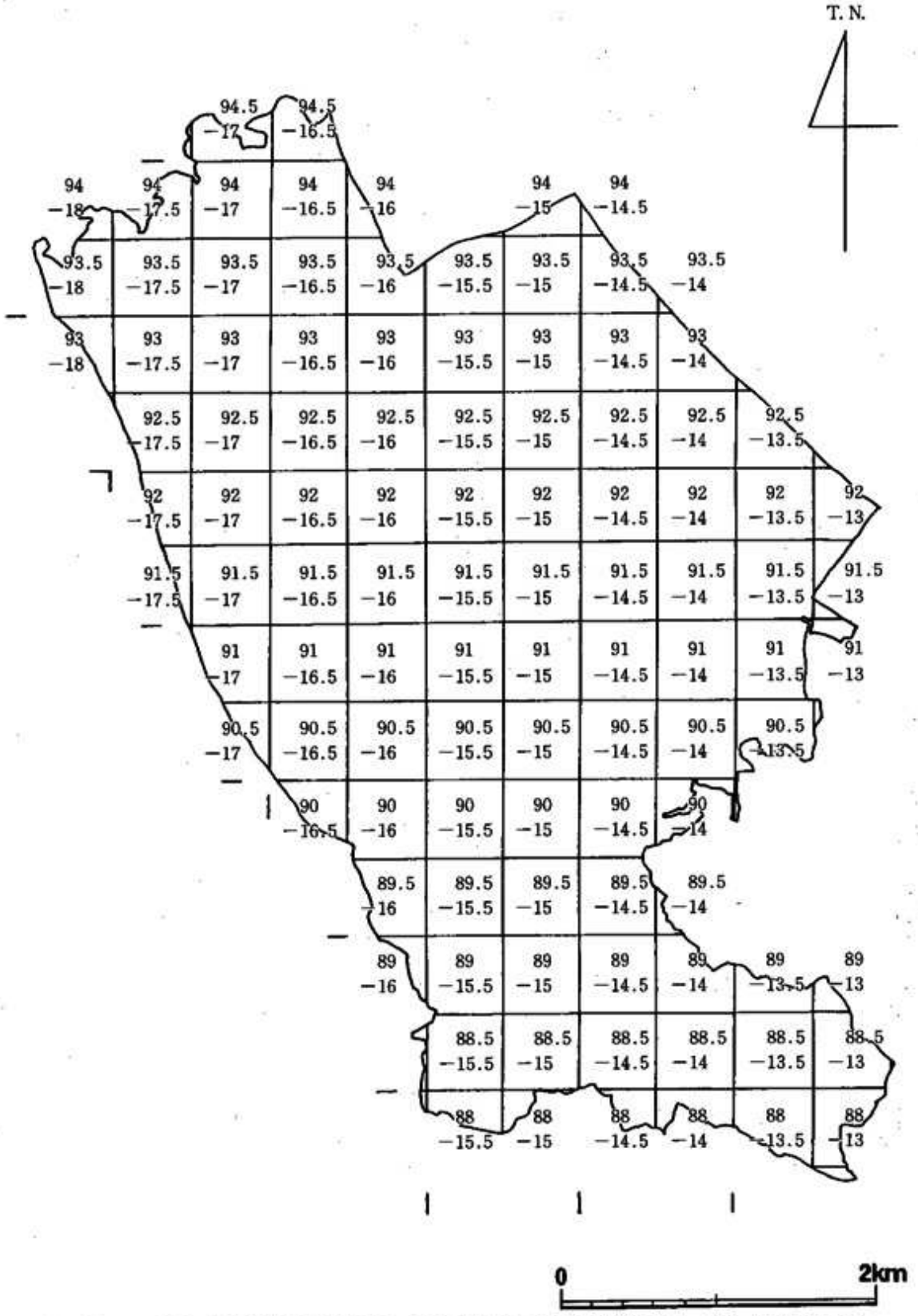
一方，残りの地区は潟の区域にあたり，現在は主として水田として利用されている。この地区の西側は国道バイパスが通り，比較的大規模な開発が多いが，基本的には遺跡は少ないと予測される。むしろ重要なのはかつて潟に面していた丘陵の裾部であろう。現時点で県内最古，古墳時代後期の須恵器窯である園カンデ窯跡は，まさにこの立地である。

現地調査は，調査区を，地形・道路・水路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿った一辺500mの方眼を単位として集計し(第5図)，時期別の採集遺物量を図示して，遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした(第6～10図)。

(大野 究)



第2図　A地区図（縮尺 1/40,000）



第 3 図　A地区の地区割（国土座標 X＝138°59′55″ Y＝35°48′を基準点とし，500m四方の方眼を組んだもの，縮尺 1/40,000）

第2章　分布調査の成果

1　遺跡と採集遺物

(1) **十二町津野遺跡**（図版9の1）　氷見市十二町津野地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。氷見市街地の西方約1.5km，上庄川下流の水田に囲まれた沖布集落がある。遺跡は沖布集落と十二町潟に挟まれた丘陵上に位置する。丘陵の西側は隣の丘陵との間に小開析谷を形成している。標高は約30～45mを測る。

採集した遺物は，細片のため図示していないが，須恵器4片，土師器1片，珠洲1片，越中瀬戸1片の総計7片である。

須恵器のうち口縁部が残存するものは2片ある。1片は蓋であり，かえりが明瞭に残っている。外面に自然釉が認められる。胎土は緻密であり，焼成は還元硬質である。7世紀代のものである。もう1片は杯であり，口径は11cmを測る。外面に回転糸輪ナデ調整を施す。胎土は緻密であり，黒色粒と白色粒を含み，外面は暗灰色，内面は淡灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

胴部破片は2片あり，いずれも外面に格子紋の叩きを施し，内面には同心円紋状の当て具痕が認められる。いずれも焼成は還元硬質である。うち1片は磨滅が著しい。（大高政史）

(2) **荒館ソモギ遺跡**（図版9の2）　氷見市荒館地内

島置崎公民館の北西約900m，丘陵に三方を囲まれた丘陵裾部に立地する。標高約20～40mを測る。およそ50m四方に広がる。従来より中世の遺跡として知られ，珠洲が過去に採集されている。今回の調査では，遺物は確認できなかった。（大泰司 統）

(3) **荒館B遺跡**（図版9の3）　氷見市十二町1292他

氷見市街地の西方約1.5km，上庄川下流の広い水田に囲まれた沖布集落がある。遺跡はこの沖布集落と南の十二町潟に挟まれた丘陵の小開析谷に位置する。標高は約6～15mを測る。今回の調査で，遺跡の範囲が従来より北へ約100m広がることを確認した。すぐ北の丘陵上には，弥生後期～奈良・平安時代の遺跡である沖布A遺跡が所在する。

採集した遺物は，貨幣2点，土師器2片，珠洲1片，青磁1片，瓦器2片の総計6片である。そのうち2点を図示した(図版3の1･2)。

1と2はいずれも寛永通宝である。1は比較的残りが良く，字も読み取ることができる。2は表裏面とも摩耗しており，字は「永」と「通」が読み取れるが，あとの二字は押し潰されている。（鈴木和子）

(4) 十二町潟排水機場遺跡 (図版10の4) 氷見市窪938他

遺跡は窪の北部に所在する。排水機場建設前は標高約0.3m～1.0mの水田であり，海岸線から約1.1km入った地点にある。従来より縄紋時代前期の遺跡として報告されていたが，今回の調査で，東西・南北各約250mの広がりを持つことを確認した。遺跡のすぐ北側を仏生寺川と万尾川が流れ，西側は国道160号線が通る。遺跡の南西には十三谷平野が広がり，水田地帯となっている。この平野は，かつて布施水海と呼ばれる潟湖であったが，堆積と干拓によって狭められ，現在は細長い十二町潟としてその名残を留めている。

1980年6月，国道160号脇の十二町潟排水機場建設工事現場の露頭を，藤井昭二氏が，氷見平野の形成過程を知ることができる良好な資料として発見した。その後，氷見市教育委員会の依頼で調査を行った際，土壌資料と共に土器や石器などを発見，採集した。自然科学的分野の成果は，松島洋氏や同じく資料を採集した安田喜憲氏によって発表された(松島1981，安田1982)。考古遺物については山本正敏，大野 究の両氏によって採集遺物の考察がなされている(山本・大野1988)。

排水場工事現場の地下3m前後の不整合面直下には，県内では稀な縄紋前期前葉の遺物包含層が存在する。炭素14年代測定法では4850±70年前から7200±70年前とされる。海棲性の貝，そしてイルカ，シカ，鮪などの遺存体が出土する。花粉分析では，ハンノキ属が30～50%と高い割合を占める事と，二葉松亜属，ソバ属が比較的割合が高いことが挙げられる。後者については炭片が多く検出される事，二葉松亜属は2次林に生える植物であることから，焼畑によるソバの栽培が行なわれていたことがわかる。しかし，この地層は流れ込みによるものであり，縄紋時代晩期の土器が2・3片出土していることから考えると，縄紋時代晩期の混入物である可能性もある。従ってこの遺跡で前期からソバ栽培が行なわれていたのか，晩期に行なわれていたのかは検討を要する(安田1982)。

これまでに出土した土器群は，早期末葉の可能性をもつもの，あるいは前期初頭のものを若干含むが，主体となるのは前期前葉の土器である。関東の編年で言うところの関山式に平行すると考えられる。他には，縄紋時代中期から晩期にかけての土器，中世のものと考えられる土師器，土製品が若干採集されている。石器については絶対量が少ないため推測の域を出ないが，石鏃の占める比率が高い(山本・大野1988)。

今回採集した遺物は，古代の須恵器5片，中世の珠洲4片，近世陶器3片の総計12片である。このうち4片を図示した(図版3の3～6)。

3は近世陶器の底部である。底径は6cmであり，削り出し高台である。胎土は粗く乳褐色を呈する。灰釉に似た透明な薄緑色の釉を内外面に施す。

4は須恵器の杯Bの底部である。9世紀頃のものである。貼り付け高台である。胎土は粗く青灰色を呈する。焼成は還元硬質・不良である。

5は須恵器の杯Aの底部である。9世紀代のものと考えられ，器壁は薄い。底径は10cmであり，

回転篦削り，あるいは糸切りの後撫で調整を施す。胎土は緻密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

6は珠洲の壺である。内面に自然釉が認められる。胎土はやや粗く青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。頸部の内径は33cmを測る。

(5) **坂津遺跡**（図版9の5） 氷見市十二町7の4番地他

氷見スーパー農道沿い，住吉神社の北約100mの丘陵裾部，標高5～30mの所に立地する。およそ50m四方に広がる。従来より平安，鎌倉期の遺跡として知られ，土師器や中世陶器が採集されている。今回の調査では，遺物は採集できなかった。

(6) **坂津横穴群**（図版9の6） 氷見市十二町221他

十二町潟の周辺，島崎の岬の南側を西の方に約700m進むと坂津集落に至る。坂津横穴古墳群は，この集落の西北から南東に向けて突き出ている丘陵の西側中腹に位置する。丘陵は高さ約37mで，一部は断崖を以て道路に接し，一部は50度の傾斜を持って宅地に続いている。頂上近くは傾斜が急で75度もある。平均65度前後の急勾配の丘陵で，雑木や竹が生い茂っている。この丘陵からは二上山が一望でき，かつての布施湖が前面に広がっていたと考えられる。

横穴群はこの丘陵の標高約7～18mのところに約50mにわたって存在し，現在37個所の横穴が確認されている。

その内の1例は，短い羨道に続いて奥行平均2.1m，幅2.13m，高さ1.65mの玄室があり，壁面はやや丸みのある幅7cm程の刃物で削られており，磨きあげたように美しくなっている。

明治17年，同地の伊佐名藤次郎が造園の際に偶然4個所の横穴を発見した。その後，明治47年8月，自宅横の山腹で雑木伐採中，再び4個所が発見され，以後多数発見された。

明治17年に発見されたた横穴からは金環などが出土している。明治40年にはさらに須恵器3点，直刀3振，銀環1点が発見された。

現在では遺物は殆どが失われ，伊佐名方に須恵器の鐙など2･3点を残すのみである。

(7) **窪北遺跡**（図版10の7） 氷見市窪2731他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。松田江浜に面する砂丘上に立地する。仏生寺川の河口より約200m遡った所からおよそ600m上流までの区間での北側岸部に所在する。標高3.0～5.0mで川岸より600m南へ広がる。現在では，畑あるいは国道415号線沿いに発達した住宅地が構成する区域である。

採集した遺物は，越中瀬戸20片，伊万里13片，近世陶器38片，唐津1片，寛永通宝1点，珠洲8片，越前2片，中世の土師器2片，時代不明の土師器片3片，須恵器6片，土錘1点，弥生土器1片の総計96片である。そのうち17片を図示した(図版3の7～23)。

7は陶錘である。全体に茶褐色の鉄釉を施している。胎土は乳褐色を呈し，焼成はやや不良である。長さ4.3cm，直径1.5cm，孔幅0.4cmを測る。近世のものである。

8は越中瀬戸の底部である。近世の火消し壺であり，体部内外面には撫で調整を施す。無釉

である。底径は12cmを測り，回転糸切りである。胎土はやや粗く，乳褐色を呈する。焼成は酸化硬質である。

9は珠洲のすり鉢である。吉岡編年のⅥ期に位置付けられ，15世紀代のものである。口縁端面に櫛目波状紋を施す。胎土は小白石が混じり，灰色味がかった青灰色を呈する。焼成は還元軟質・不良である。

10は越中瀬戸の小皿である。口径は10cmであり，体部外面に茶色味の強い鉄釉を施す。胎土は緻密であり，乳褐色を呈する。焼成は酸化軟質・良好である。

11は越中瀬戸の小皿の底部である。底径は6cmであり，削り出し高台である。胎土は緻密であり，乳褐色を呈する。焼成は酸化軟質・良好である。

12は越中瀬戸の広口壺である。口径は10cmである。胎土は若干砂粒が混じり，やや粗い。焼成は酸化やや軟質である。

13は越中瀬戸のすり鉢の底部である。底径は8cmであり，回転糸切り痕を残す。内面には明茶褐色，外面には茶褐色の鉄釉を施す。胎土は緻密であり，橙褐色を呈する。焼成は酸化硬質である。

14は珠洲のすり鉢である。吉岡編年のⅤ期もしくはⅥ期に位置付けられ，15世紀代のものである。卸目は３帯確認でき、１帯の幅は2cmであり条数は8条を数える。胎土は緻密であり，白色砂・黒色砂が混じり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

15は越中瀬戸の鉢である。口径は11cmを測る。無釉である。胎土はやや粗く白色砂多く含み，灰褐色を呈する。焼成は酸化硬質である。

16は須恵器の杯類の口縁部破片である。口径は13cmを測る。胎土はやや粗く灰色を呈する。

17は珠洲の壺である。13・14世紀頃のものであろう。外面に3cm幅に8条の平行叩き目を施し，裏面には当て具痕が認められる。

18は越中瀬戸の皿の底部である。底径は4.6cmであり，回転糸切り底である。見込み部に直径4.4cmの輪トチ痕を残す。暗茶色の鉄釉を施す。胎土は緻密であり，乳褐色を呈する。

19は伊万里の椀である。口径は14cmを測る。体部内外面に藍色の釉で梅の絵柄を描く。

20は器種不明の近世陶器である。体部内外面に黄色味がかった乳褐色の釉を施す。胎土は緻密であり，乳褐色を呈する。焼成は酸化硬質・良好である。

21は須恵器の杯Ｂである。9世紀後半頃のものである。底部は篦削り後，高台を貼りつけている。内底面は指撫で，外底面は篦切り後，軽く撫で調整を施こしている。胎土はやや粗く白小石が少々混じり，青灰色を呈する。焼成は還元やや軟質である。

22は珠洲の甕である。吉岡編年のⅣ期に位置付けられ，14世紀頃のものである。外面に3cm幅に9条の平行叩き目を施し，内面には当て具痕が認められる。胎土は緻密であり，白砂が混じり，内外面は青灰色，断面は明灰色を呈する。なお22は南条神社境内で採集した。

23は珠洲の甕の口縁部である。吉岡編年のⅣ期に位置付けられ，14世紀代のものである。口

縁端部から外面にかけて自然釉が認められ，外面に3cm幅に15条の平行叩き目を施す。胎土は緻密であり，白色粒，黒色粒が混じり，内面は青灰色，外面は黒灰色を呈する。焼成は，還元硬質である。

(8) **松田江北遺跡**（図版10の8） 氷見市窪2072他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。松田江浜に面する砂丘上に立地する。東西はＪＲ氷見線から約500ｍ離れた県道藪田・下田子線にほぼ平行して走る広い通りまで，南北は小松製作所氷見工場の敷地の北端より南へ約1kmの範囲をもつ。標高は約2.8～5.0ｍを測る。

採集した遺物は伊万里25片，唐津1片，越中瀬戸37片，近世陶器42片，珠洲6片，須恵器16片，青磁1片，土師器24片（うち中世7片），弥生土器8片，縄紋土器6片，貨幣1点（寛永通宝），鉄製品3片（キセル2，釘1）の総計170片である。そのうち図化したものは7片である（図版3の24～30）。

24は珠洲の壺の底部である。13～14世紀のものと考えられる。底径は10cmで，回転糸切り底である。内面には轆轤撫で調整痕が認められる。胎土は緻密であり，白色砂が混じる。焼成は還元硬質である。

25は珠洲のすり鉢である。吉岡編年のⅣ期に位置付けられ，14世紀代のものである。口径は28cmを測る。胎土はやや粗く少々白砂が混じり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

26は須恵器の杯Ｂである。器高は低く8世紀代のものと考えられる。口径は12cmを測る。胎土はやや粗く青灰色を呈する。焼成は還元軟質である。

27は近世陶器である。黄色味の濃い黄緑色の釉を施す。胎土はやや粗く乳褐色を呈する。焼成は酸化軟質である。

28は須恵器の甕である。8～9世紀代のものであり，内面に同心円紋の当て具痕が認められる。同心円には木目が交差し，円には歪みが多少生じ，8世紀中頃以後のものと考えられる。外面には3cm幅に10条の平行叩き目を施す。胎土は粗く白粒が混じり，灰色を呈する。焼成は還元軟質である。

29は土師器である。9～10世紀代のものであろう。口径は8cmを測る。手づくね成形である。胎土はやや粗く明茶褐色を呈する。焼成は良好である。

30は伊万里の小破片であり茶碗と考えられる。絵柄は不明であり，釉は濃紺を呈する。胎土は緻密であり，白色を呈する。焼成は良好である。

(9) **窪シムラ遺跡**（図版10の9） 氷見市窪1971他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。柳田狐塚と呼ばれる塚が存在したと伝えられる地点を含み，松田江浜沿いの砂丘地区に立地する。窪小学校の北東部から約450ｍ南東方向に，約250ｍ北東方向にひろがる地域に所在し，標高は3.0～5.0ｍを測る。

採集した遺物は近世陶器8片，越中瀬戸4片，無釉越中瀬戸の骨壺片2片，伊万里6片，瓦器1片，土師器8片，珠洲1片，須恵器5片，弥生土器2片，縄紋土器2片，古代の土錘1点の総計39片である。そのうち4片を図示した（図版3の31～34）。

31は珠洲の壺である。口径は12cmである。外面に自然釉が認められる。胎土はやや粗く白色砂が混じり青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

32は近世陶器の皿である。底径は8.4cmで釉調は灰白色である。胎土はやや粗く乳褐色を呈する。焼成は酸化軟質である。

33は伊万里の椀である。外面には，波状の紋様が描かれている。胎土は緻密であり，白色を呈する。

34は土錘である。土師質であり，古代のものである。長さ4.4cm，直径4.1cm，孔幅1.2cmを測る。胎土はやや粗く橙褐色を呈する。焼成は酸化軟質・良好である。

(10) **柳田南遺跡**（やないだみなみ）（図版11の10） 氷見市柳田1050他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。松田江浜に面する砂丘上に立地する。西條中学校の北方に広がる。中学校の北にある交差する通りの北西方向に走る通りの方を長軸とする楕円形状に遺物が散布する。長軸は約500m，短軸は約300mであり標高は4.2～5.2mである。

採集した遺物は，近世陶器6片，越中瀬戸4片，須恵器2片，土師器3片，弥生土器4片の総計19片である。そのうち2片を図示した(図版3の35･36)。

35は伊万里の椀である。体部内外面に牡丹と考えられる絵柄が描かれている。胎土は緻密であり，白色を呈する。

36は瀬戸の平椀の底部である。灰釉が器内外面に施されており，高台の接地面は灰釉を掻き取っている。底径は6cmを測る。（大泰司 統）

(11) **柳田茨木遺跡**（やないだいばらぎ）（図版11の11） 氷見市柳田2819他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。氷見駅から南へ約2km，氷見から高岡へむかう高岡街道と，伏木へむかう伏木街道(氷見・魚津線)との分岐点がある。遺跡は，ここから伏木街道に沿って少し南東に進んだ所に街道を挟んで所在する。現在は住宅街となっている。隣接して北側には，弥生時代後期から古墳時代にかけての柳田遺跡がある。

採集した遺物は，細片のため図示していないが，弥生土器1片，土師器2片，珠洲1片，近世陶器1片の総計5片である。（大高政史）

(12) **柳田布尾山遺跡**（やないだぬのおやま）（図版11の12） 柳田布尾山地内

従来より縄紋時代の遺跡として知られ，縄紋土器，石器などが採集されている。国道160号線沿いにある雇用促進住宅柳田第二宿舎の西200m地点にある丘陵の中腹部，標高約20m～35mまでの斜面上に立地する。今回の調査で南北に300m，東北に250mの広がりを持つことを確認し，従来知られていた面積の約4倍であることが判った。

採集した遺物は，近世陶器3片，須恵器1片，土師器6片の総計10片である。その内3片を図示した(図版3の37～39)。

37は珠洲の壺である。吉岡編年のⅣ期に位置付けられる。体部外面に自然釉が認められる。口径は16cmを測る。胎土はやや粗く青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

38は越中瀬戸の骨壺の底部である。無釉である。底径は7cmであり，回転糸切り底である。胎土はやや粗く乳灰色を呈する。焼成は酸化軟質である。

39は越中瀬戸の骨壺である。無釉である。胎土はやや粗く石英が少々混じり，橙褐色を呈する。焼成は酸化軟質である。

⑬ **柳田沖宮遺跡**（やないだおきみや）（図版11の13） 氷見市柳田1611他

園長提遺跡の同丘陵上の反対側の斜面の裾部，国道160号線より約400m西方にある。園長提遺跡と同様に鉄滓採集地である。今回の調査では遺物は確認できなかった。

⑭ **園長提遺跡**（そのながつつみ）（図版11の14） 氷見市園1155他

県道五十里・氷見線の約400m南，正提の東に面する丘陵斜面に位置する。従来より鉄滓が出土した事で知られている。時期など詳細は不明だが，丘陵ひとつを挟み北西400m程の所に古墳時代後期の須恵器窯である園カンデ窯が所在しており，その付近でも古代のものと考えられる鉄滓が採集されている。（大泰司 統）

⑮ **島尾北遺跡**（しまおきた）（図版11の15） 氷見市島尾46番地他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。前述した柳田茨木遺跡より，伏木街道に沿って約400mほど南下したところに位置する。現在は水田として利用されている。

採集した遺物は，縄紋土器1片，弥生土器17片，須恵器6片，土師器57片，珠洲1片，越中瀬戸2片，近世陶器4片，伊万里2片，磁器2片，不明陶器3片の総計96片である。

採集した遺物は細片のため図示しなかったが，口縁部の残存する須恵器が1片ある。器種は壺である。口径は18cmを測る。胎土は緻密であり，淡灰色を呈する。内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。

口縁部の残存する土師器は2片ある。いずれも皿であり，内外面に轆轤回転撫で調整を施す。そのうち1片は口径8cmを測る。胎土は粗く白色粒を含み，淡赤色を呈する。もう1片は口径は9cmを測る。胎土は粗く白色粒を含み，暗茶褐色を呈する。

珠洲は甕の胴部破片である。胎土は緻密であり，青灰色を呈する。

越中瀬戸1片は皿の底部である。削り出し高台である。内外面ともに回転轆轤撫で調整を施す。胎土は白色粒を含み淡赤褐色を呈する。（大高政史）

⑯ **堀田サカイ遺跡**（ほりた）（図版12の16） 氷見市堀田4387他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。大浦池より北方へ約500mの所にある丘陵部を越えた斜面から平地部にかけて立地する。標高は約4.0m～30.0mを測る。平地部は水田，畑，墓地として利用されている。

採集した遺物は，伊万里3片，近世陶器1片，越中瀬戸2片，磁器1片，土師器1片，須恵器1片，弥生土器1片の総計10片である。そのうち4片を図示した（図版3の40～43）。

40は須恵器の甕である。内面に同心円紋を施す。叩き目には木目が浮き出ている。外面にはカキ目及び平行叩き目を施す。8～9世紀代のものと考えられる。内面には自然釉が認められる。

胎土はやや粗く黒色砂，白色砂が混じり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

41は近世以後の陶器の底部である。底径は5.4cmを測る。胎土は緻密であり，黒色を呈する。焼成は還元硬質である。

42は土師器の皿である。16世紀代のものと考えられる。手づくね成形である。胎土はやや緻密であり，赤褐色を呈する。焼成は酸化還元である。

43は伊万里の椀である。絵柄は不明で黒味の強い青色の釉で描かれている。胎土は緻密であり，白色を呈する。焼成は良好である。

(17) **柳田(やないだ)遺跡**　(図版10の17)　氷見市柳田2975他

国道415号線が県道藪田・下田子線と交わる所から北西約300mのところに国道415号線をはさんで所在する。弥生時代の遺跡として，従来より知られていた。今回の調査で遺跡の範囲が北東へ広がることを確認し，国道415号線より北東へ約500m，南西へ約50m，北西，南東へは約300mの広がりを持ち，標高2.0～3.0mの海岸に面する砂丘上に立地することが分かった。沿道は住宅地であるが，海岸方面には畑が広がる。昭和32年の氷見高校歴史クラブの調査によって，弥生時代後期から古墳時代初頭までの土器を中心とした遺物が得られている。

採集した遺物は伊万里5片，瓦器1片，越中瀬戸5片，近世陶器7片，土師器9片，須恵器15片，弥生土器40片，縄紋土器1片の総計83片である。そのうち14片を図示した（図版4の44～61)。

44は須恵器であり，器種は不明である。外面に叩き目を施す。胎土は緻密であり，赤味がかった青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

45は須恵器の杯Bである。10世紀代のものと考えられる。外面には自然釉が認められる。胎土は緻密であり，白色粒が混じり青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。この他に小破片のため，図示しなかったが，採集地点のすぐ近くで8～9世紀代の甕・杯を1点ずつ採集した。

46は須恵器の杯Bである。底径は14cmである。9世紀後半頃のものと考えられる。胎土はやや粗く白色粒が混じり青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

47は須恵器の杯Bである。底径は6.8cmである。9世紀代のものと考えられる。胎土は緻密であり，白色粒が混じり青灰色を呈する。焼成は還元硬質だが，やや不良である。

48は須恵器の甕である。9世紀代のものと考えられる。外面には3cm幅に10条の平行叩きを施し，内面には3cm幅に12条の平行当て具痕が認められる。胎土はやや粗く青灰色を呈する。焼成は還元軟質である。

49は須恵器の甕である。9世紀代のものと考えられる。外面には3cm幅に10条の平行叩きを施し，内面には3cm幅に8条の平行当て具痕が認められる。胎土やや粗く青灰色を呈する。焼成は還元硬質だが，やや不良である。

50は須恵器の甕である。8～9世紀代のものである。外面には3cm幅に18条の平行叩き目を施す。内面には同心円状の当て具痕が認められる。胎土はやや粗く青灰色を呈する。焼成は還元硬質だが，やや不良である。

51は弥生土器の甕頸部である。外面に炭化物が付着する。頸部より下部内面に粗い刷毛調整を施し，頸部より上部内面と外面にはより細かい刷毛調整を施す。胎土はやや粗く少々砂が混じり橙色を呈する。焼成はやや不良である。

52は弥生土器である。内面に炭化物が付着する。粗い刷毛目が施される。胎土はやや粗く少々砂が混じり橙色を呈する。焼成はやや不良である。51･52･54の弥生土器を採集した付近であり，弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器を多数採集した。

53は土師器の小皿である。平安時代のものと考えられる。口径は10cmを測る。胎土はやや粗く橙褐色を呈する。焼成はやや良である。この遺物の採集地点付近では10世紀代を中心とする平安時代の土師器の小破片が多数採集されている。

54は弥生土器である。内外面に炭化物が付着する。胎土はやや粗く少々砂が混じり橙色を呈する。焼成はやや不良である。

55は近世陶器の椀である。体部の内外面に灰色の釉を施す。胎土はやや粗く灰色を呈する。焼成は酸化硬質・良好である。

56は近世陶器の椀である。藍色釉であり，口縁内外面に二条の横線を施す。胎土は緻密であり，白色を呈する。焼成は酸化硬質・良好である。

57は越中瀬戸匣鉢の底部である。窯道具として用いられていた匣鉢が消費地で使用されたものである。底径は7cmで糸切り底である。胎土はやや粗く赤褐色を呈する。焼成は還元硬質だが，やや不良である。

⑱ **島尾（しまお）遺跡**　（図版11の18）　氷見市島尾1937他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。松田江浜に面した砂丘上に位置し，標高は約5.0mを測るが，区域内に標高10m程の隆起がある。海岸部より約500m内陸にあり，泉川より100m北方にある。ＪＲ島尾駅を中心に発達した住宅地の北西部で，現在は住宅地，福善寺の墓地，まばらな畑として利用されている。

採集した遺物は近世陶器3片，土師器（中世）1片，越中瀬戸15片，唐津1片，14世紀末～15世紀初頭の青磁1片の総計21片である。そのうち4片を図示した(図版4の58～61)。

58は越中瀬戸の骨壺の蓋である。無釉である。体部外面には「夏」と考えられる文字が記されている。口径は16cmを測る。

59･60は越中瀬戸の骨壺の口縁部である。共に口径は12cmを測る。無釉である。ただし60の胴部は，59よりややすぼまると考えられる。

61は越中瀬戸の骨壺蓋である。口径は16cmを測る。無釉である。

⑲ **上泉遺跡**（図版11の19） 氷見市宮田486の1

二上山丘陵から派生し，北は上泉，宮田に延びる丘陵の先端部東側の小開析谷に位置する。標高は約16ｍを測る。現在では水田として利用されている。

須恵器，珠洲が採集されており，古墳～中世の遺跡と考えられているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑳ **上泉西遺跡**（図版11の20）氷見市上泉地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。氷見工業団地より北西約300ｍのところにある丘陵地帯に立地する遺跡である。標高は約20～34ｍを測り，およそ2万㎡の広がりをもつ。今回の調査では近世陶器3片，古代の須恵器1片，土師器1片を採集したが小破片のため図示しなかった。

㉑ **大浦深素遺跡**（図版11の21） 氷見市大浦字深素地内

小松製作所氷見第２工場の北方300ｍ，南北に延びる丘陵の東斜面に位置する。標高は約6.0～20.0ｍを測る。南北に150ｍ，東西に50ｍ程の広がりをもつ。従来より古代の遺跡として知られ，須恵器が採集されている。今回の調査では遺物を採集できなかった。

㉒ **馬乗山遺跡**（図版12の22） 氷見市堀田3638番地

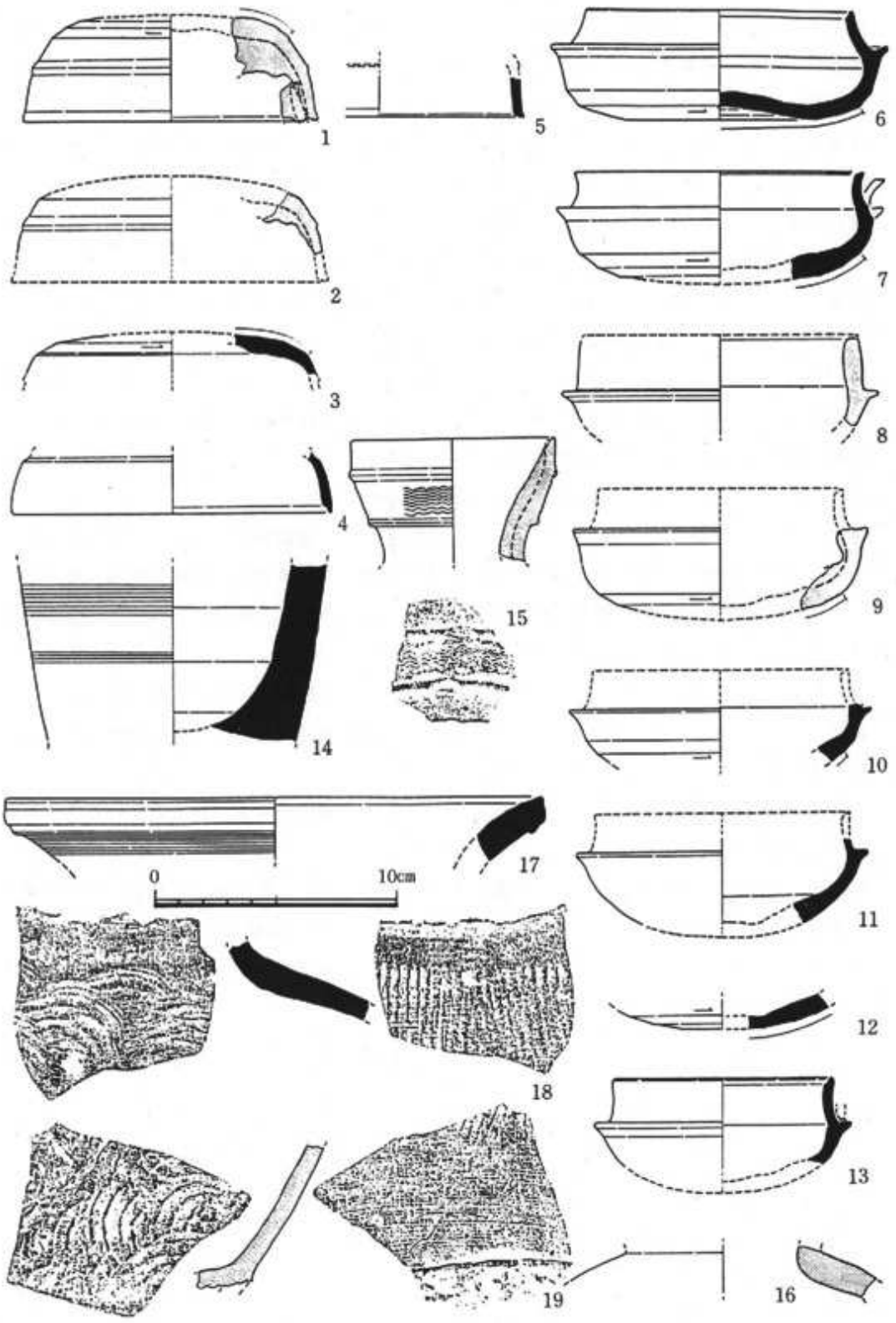
大浦池より北西へ約400ｍのところに，東方から西方に向かって張り出す高さ約30ｍの丘陵がある。遺跡はこの丘陵の南側中腹に位置する。昭和38年，耕作時に土器が出土しているが，氷見高校歴史クラブによって概況調査が行われたのみである。その際，古墳時代初期の遺物が確認されている。墳墓の可能性があるとされてきたが，今回の調査で丘陵の頂部に円墳状の墳丘が確認された。詳細は今後の調査を待たなければならない。更にその墳丘上に石積みによる塚状の遺構の存在も確認された。遺物は，伊万里1片，近世陶器1片，越中瀬戸1片を採集したが，いずれも小破片であった。

㉓ **園カンデ窯跡・製鉄遺跡**（図版12の23）氷見市園19番地他

遺跡は氷見市園地内に所在する。仏生寺川の右岸，二上丘陵から北にのびる台地が平野部に最も張り出した場所が園であり，その北側には十二町潟周辺の湿地帯が広がる。窯跡は，頂上に園生神社が鎮座する丘陵の西側斜面裾部に立地する。この斜面の南側は，丘陵を削って谷を堰止めて築いた浦池につながる。

今回の調査では遺物を採集できなかったが，西井龍儀氏らが採集・報告した成果を再掲して紹介する（西井他1988）。

須恵器や窯壁破片の散布範囲は，土取り部分の北側に接して，崖面に沿って東西約15ｍにわたる。土取り面へ崩落した状態で散布している。土取りされていない北側の斜面では，道路に削り込まれた裾部で約10ｍの範囲で遺物が散布することから，この位置が灰原であると推測された。斜面下部の水田面の標高はおよそ5ｍ，丘陵頂部で35ｍを測るが，遺物はそのうち標高約7～11ｍの標高に散布し，最も浅い散布地の頂部の落込みは窯体の痕跡である可能性がある。窯は細砂質地盤に築いた1基のみと見られ，灰原の大部分とともに残存している可能性も高い。



第4図　園カンデ窯採集遺物（西井他　1988）

採集された遺物には須恵器，窯壁破片の他，若干の縄紋土器，珠洲があり，地点を少し隔てて鉄滓や炉壁片が整理箱に約一箱分採集されている。

須恵器の多くは，焼き歪みや焼き膨れが著しく，溶着したものもみられる。表面は暗褐色から灰褐色となるものが多く，焼きしめの良いものは断面中央部に茶紫色の酸化部分を残す特徴をもつ。胎土には白砂粒を含み，吹き出しの著しいものがある。焼き膨れは杯蓋，杯など内面に膨れる傾向がある。胎土には海綿骨針を含む。

器種には蓋杯，すり鉢，直口壺，甕があり，甕の胴部破片が最も多い。

杯蓋（1～5）：1･2は焼き膨れが著しいが，外皮近くに硬質部が残り，外形の変化は少ないと考えられる。1の体部内面には杯身の立ち上がり部分が溶着し，蓋と身がセットで焼成されたことを示す。器形はほぼ平な天井頂部から体部にかけ，急角度に下がった位置に肩の稜がめぐる。口縁端部は肩よりもやや外にでる。稜は低い凸帯であり，口縁下端には匙面風の段を持つ。天井外面の篦削りは肩に移行する角度の変わるところまでなされ，その方向は1が右（順まわり），3が左（逆まわり）である。1の口径は12cm，高さ4.4cmである。

杯（6～13）：法量の最も大きい6は，立上がり口径11cm，受部外径13.8cm，高さ4.5cmで，立ち上がりはやや内傾し，高さは1.5cmである。胎土に多量の砂粒を含む。底部が内面へ焼け歪んでいる。外面の大半は篦削り調整され，その回転方向は右である。最も小さい13は，立上がり口径9.1cm，受部外径10.5cm，立上がり高さは1.7cmでほぼ直立する。受部に蓋の端部が溶着している。8の立上がりの高さは2.2cmとやや大きい。いずれの口縁端部にも匙面風の段をもつ。杯の法量としては6よりやや小さめとなるものが多く，底部は丸みを帯び，篦削り調整の方向は全て右である。

すり鉢（14）：口縁部と底部を欠損するものの，厚肉の器体からすり鉢と考えられる。外面にカキ目調整が加えられている。

直口壺（15）：口頸部のみであり，体部の形状は不明である。焼き膨れており，やや外傾する口頸部の中ほど，2条の凸帯の間に波状紋がめぐる。16は甕の肩部と見られる。

甕（17～19）：17は中型甕の口縁部であり，外反する口縁端部に2条の浅い凹線をめぐらす。頸部はカキ目となる。体部外面の叩き目は不鮮明なものが多く，19のようにカキ目調整するものもある。内面の当て具痕は同心円紋であり，同心円の間隔はやや粗く，打ち込みも総じて浅い。18と19の二種類の同心円紋がある。

窯壁破片：スサ入りであり，暗灰色に還元焼成されている。一部に焼けただれた面を残すものがある。

縄紋土器：前期末の特徴をもつ破片が2点あり，同一個体となるかもしれない。

珠洲：甕の胴部破片一点のみであり，やや摩滅している。年代は特定できない。道路西側の畑からの採集である。

鉄滓・炉壁：破砕面のある鉄滓や，塊状の炉壁の他，フイゴの羽口とみられる破片がある。

須恵器散布地の北側の斜面裾から道路に散在し，年代は不明である。

以上の須恵器は，陶邑窯ＴＫ47型式からＭＴ15型式にかけての時期のものであり，6世紀初め頃の年代と考えられる。氷見市内に所在する朝日長山古墳は，前方後円墳である可能性が高くまたほぼ同時期のものであるが，園カンデ窯ののほうが，やや古い。

越中（富山県）射水郡の古代須恵器窯は，これまで射水丘陵内において集中して知られていたが，本例は氷見市域で初めて発見された須恵器窯である。またその年代は，６世紀初めを前後する時期であり，現在の所，富山県内では最古の須恵器窯である。また北陸全体でも，最古級須恵器窯であり，重要な位置を占めている。（大泰司 統）

㉔ 大浦遺跡（図版12の24） 氷見市大浦1021他

堀田川にかかる大浦橋より北東約200ｍのところにある北方に独立するように突出した標高約8.0～30.3ｍの丘陵部と，その東方約100ｍの位置にある標高約2.5ｍ，150㎡ほどの水田の一角に位置する。水田からは弥生時代の遺物が出土したとされるが詳細は不明である。

採集した遺物は，唐津1片，近世陶器1片，珠洲1片，伊万里1片の総計4片である。このうち3片を図示した(図版4の62～64)。

62は唐津椀の底部である。高台を削り出し，内外面に淡黄白色の釉を施す。胎土は緻密であり，暗赤褐色を呈する。焼成は還元硬質である。

63は伊万里の皿の口縁部である。口径は約18㎝を測る。内外面に藍色の釉で線状の絵柄を描いている。胎土は粗く乳白色を呈する。

64は珠洲のすり鉢の口縁部である。口縁部の残存が悪いため，口径，時代は不明である。胎土はやや粗く黒色粒，白色粒を含み，外面は淡灰色で内面は暗灰褐色を呈する。焼成は還元硬質である。

㉕ 堀田竹端遺跡（図版12の25） 氷見市堀田1422他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。二上山丘陵から派生する小丘陵のひとつは，北は堀田に至る。丘陵下には現在の堀田集落が広がり，平地には水田が広がっている。遺跡は丘陵から近いこの平地の水田上に立地する。

採集した遺物は，土師器1片，越中瀬戸1片，近世陶器2片，伊万里1片の総計5片である。このうち2片を図示した(図版4の65･66)。

65は伊万里の椀の口縁部である。口径は約10㎝を測る。外面に薄い青色の釉で絵柄を施す。胎土はやや粗く乳白色を呈する。

66は土師器の皿の口縁部である。口径は約13㎝を測る。口縁端部をわずかに上に引出す。胎土は粗く1～2㎜の白色粒が混じり，淡黄褐色を呈する。焼成は酸化軟質である。

㉖ 四十塚遺跡（図版11の26） 氷見市下田子1の3番地

二上山丘陵から派生し，泉川と十二潟とに挟まれた丘陵のほぼ中間，東西から入る小開析谷の境界に近い東側斜面にある。標高約40ｍを測る。昭和30年と34年に氷見高校歴史クラブが発

掘調査を行っている。その後，昭和45年，工事建設に伴う緊急発掘調査が行われた。遺跡は現在は消滅している。

縄紋後期から晩期初頭までを主体とする遺跡であるが，わずかながら縄紋中期中葉天神山式期から後葉串田新式期の土器が出土し，後期初頭気屋式期の土器はそれよりも多少多く出土している。本遺跡の遺物の大半は，後期中葉から後葉までの土器で，後期末から晩期初頭のものはそれより幾分少ない。なお土師器，須恵器は表面採集のものを除けばごくわずかである。

採集した遺物は，須恵器19片，土師器4片，越中瀬戸1片，近世陶器3片，伊万里1片，磁器1片の総計29片である。このうち2片を図示した(図版4の67･68)。

67は須恵器の蓋の口縁部である。口径は約15cmを測る。端部を下方に折り曲げており，8世紀後半のものと考えられる。内外面ともに回転撫で調整を施す。胎土はやや粗く白色粒を含み，淡灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

68は須恵器の杯の口縁部である。口径は約14cmを測る。体部中ほどに緩やかな綾線があり，8世紀後半頃のものと考えられる。胎土はやや粗く白色粒を含み，淡灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(鈴木和子・大高政史)

(27) **多胡城跡** (図版11の27) 氷見市下田子地内

二上山丘陵から派生する小丘陵の東斜面に位置する。丘陵の西側には現在の堀田集落が所在する。標高は約40mを測る。

白藤山光照寺は現在市内朝日本町に所在するが，文明年末から安永9年(1780)まで越中多胡に所在し，中世一向宗の大寺院であったという。本遺跡は，橋本芳雄氏がその寺院の旧所在地に推定している地点にある(橋本1981･1986)。 現在のところ光照寺に直接結びつく遺物・遺構は確認されていないが，台地西南部に「殿干場」，その北側の台地下に「巻城」という小字が残っている(氷見市教育委員会1988)。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(28) **堀田大久前遺跡** (図版13の28) 氷見市堀田2074他

二上山丘陵から派生する小丘陵に挟まれた細長い谷の出口に位置する。谷を出た北側には堀田集落が所在する。標高は約8mを測る。本遺跡の所在する場所は，かつての川底であり，遺跡の中心はその南側にある可能性が高い。約600m離れたところには，堀田ワタリウエ遺跡が所在する。両遺跡は出土遺物の時期がほぼ重複しており，関連が考えられる。

1966年，堀田川の河川改修工事で土器が出土して，遺跡登録された。1979年には氷見市教育委員会が農免道路拡張に伴う発掘調査を行っている。遺構は確認されなかったが，須恵器・土師器・珠洲が検出された。須恵器は杯蓋が11個体出土しており，そのうち7個体の裏面に墨が付着しており，硯に転用されていることが確認できる。このことから識字層が存在したことが想定されるが，このことは今後遺跡の性格を検討する上で重要であろう。遺物より，本遺跡の存続時期は7世紀中葉から9世紀前半頃と，13世紀頃の2時期であると推定できる(氷見市教育委員会1988)。今回の調査では遺物は確認できなかった。

㉙ **堀田ナンマイダ松古墳**（図版13の29） 氷見市堀田地内

二上山丘陵から派生する小丘陵上に位置する。標高は約45mを測る。1980年11月に確認された円墳であり，径約21.0m，高さ4.0mを測る。現段階では，三段築成の円墳と考えられる。遺物は出土しておらず，今回の調査でも遺物は確認できなかった。（鈴木和子）

㉚ **堀田東谷内遺跡**（図版13の30） 氷見市堀田地内

二上山丘陵から派生する丘陵の西側の小開谷に位置し，堀田ナンマイダ松古墳の北東約300mのところにある。遺物などは確認されておらず，詳細は不明である。今回の調査でも遺物は確認できなかった。（大泰司 統）

㉛ **堀田ガス山遺跡**（図版13の31） 氷見市堀田1369他

二上山丘陵から派生し，北は堀田に延びる小丘陵の小開析谷に位置する。谷を出たところには，現在の堀田集落が所在する。遺物などは確認されておらず，詳細は不明である。

今回の調査でも遺物は確認できなかった。

㉜ **堀田館ノ山塚遺跡**（図版13の32）氷見市堀田地内

二上山丘陵から派生する小丘陵上に位置する。北側には現在の堀田集落が所在する。標高は約55mを測る。径約6.5m，高さ約1.0mの円形のマウンドであるが，遺物は出土しておらず，性格などは不明である。本遺跡の北西には，中世の遺跡と考えられる堀田城跡が所在する。今回の調査では遺物は確認できなかった。（鈴木和子）

㉝ **田子遺跡**（図版11の33） 氷見市下田子3番地

田子丘陵は北は十二町潟，南は西田川に沿う氷見・高岡街道との間に延びている丘陵の一部である。この丘陵の上には，東西1km南北500mにも及ぶ平坦地があり，この台地上から縄紋土器や土師器，須恵器などの土器片が出土する。遺跡はここに位置する。標高は約30mを測る。今回の調査で，従来より東西に約200m，南北に約100m遺跡の範囲が広がることを確認した。

今回の調査で採集した遺物は，須恵器2片，伊万里1片の総計3片である。このうち2片を図示した（図版4の69・70）。

69は須恵器の蓋の口縁部である。口径は約15cmを測る。内外面ともに轆轤回転撫で調整痕が認められる。内面にかえりがわずかに認められ，7～8世紀頃のものと考えられる。胎土はやや粗く1mm前後の白色粒を含み，暗灰褐色を呈する。焼成は還元硬質である。

70は須恵器である。器種は不明である。内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。器壁は厚く，7mm前後である。胎土は粗く淡灰色を呈する。焼成は還元硬質である。（大高政史・鈴木和子）

㉞ **小竹山城跡**（図版14の34） 氷見市小竹地内

二上山の西麓，小竹山（摩頂山あるいは弘源寺山）に位置する。標高は251.1mを測る。この地は従来から国泰寺の発祥地として知られ，付近から多量の古銭などが出土していたが，平成2年の守山城周辺踏査により，山頂部付近を中心として複数の郭や堀切遺構が確認され，城跡であることが確認された。

城の規模は，東西約300m，南北400mに及ぶ。東西に伸びる尾根に主要な郭を連ねた，いわゆる連郭式の山城である。堀切・平坦地・土橋などの遺構が認められる。

遺物は，主に郭Aより南東に少し降りた標高約205～220mの平坦地とその周辺で採集した。採集した遺物は，須恵器，土師器，珠洲，越前，青磁，釘，炭化米などである。土器はいずれも細片であるが，越前16点と珠洲13点でほとんどを占める。遺物は大きく三つの時期に分けられる。古代の遺物には須恵器と土師器があり，いずれも9～10世紀のものと推定される。珠洲は吉岡編年のⅣ期(14世紀)に位置付けられると考えられる。青磁もほぼ同時期のものである。越前は楢崎・田中編年(楢崎他1989)のⅤ期後半(16世紀後葉)に位置付けられる。

本遺跡の正南約1kmには守山城が所在する。本遺跡の構造が特に西側を警戒していると考えられること，氷見市域に展開する城を睨むところに位置すること，あるいは守山城と似通った築城技術がみられることなどから，小竹山城は守山城の出城と考えることができる。なお，遺跡の周辺には，「城殿」「七曲」など城に関係する地名が多く伝承されている(林寺1992)。今回の調査では遺物は確認できなかった。　　(鈴木和子)

(35) その他の採集遺物

遺跡として設定した地区外の採集品である(図版4の71～74)。採集地区の座標については，第3図を参照されたい。

71は土師器の皿の口縁部である。口径は約12cmを測る。手づくね成形であり，口縁下部に一段撫でを施し，口縁は外反し端部はやや丸くおさめる。胎土は緻密であり，淡橙色を呈する。焼成は極めて良好である。16世紀代のものと考えられる(X＝－16，Y＝91.5)。

72は土師器の皿である。口径は12cmを測る。手づくね成形であり，口縁下部に一段撫でを施す。口縁部は丸く内湾する。胎土は粗く黒色粒を含み，淡橙色を呈する(X＝－16，Y＝91.5)。

73は土師器の皿である。口径は約10cmを測る。手づくね成形であり，体部の立ち上がりは強く，口縁端部の面取りは認められない。胎土はやや粗く1mm前後の赤褐色粒をふくみ，淡黄褐色を呈する。焼成は酸化軟質である。13世紀末から14世紀代のものと考えられる(X＝－14，Y＝90.5)。

74は須恵器の甕である。外面は格子紋の叩きを施した後に撫で調整がなされている。内面には同心円紋の当て具痕が認められる。胎土は密であり，白色粒を含み暗灰色を呈する。焼成は還元硬質である。古代のものと考えられる(X＝－14，Y＝90)。　　(大高政史・鈴木和子)

(36) 住吉神社(すみよしじんじゃ)境内の石造物　(図版9の36)　十二町坂津地内

氷見市街地の西方約2km，坂津横穴群の北に接するかたちで農免農道沿いに位置する。今回の調査で，この神社境内に置かれている五輪塔4個体を確認，実測した(図版5の1～4)。

1は火輪であり，境内入口左に置かれている。高さ16.0cm幅25.0cmを測り，厚さは不明。笠が高く，反りが大きい。石材は凝灰岩を用いている。

2は水輪であり，境内入口左に置かれている。高さ18.7cm，直径27.5cmを測り，胴部の張り

はやや弱い。1の火輪の下に置かれている。

3は火輪であり，境内入口右奥に置かれている。高さ13.2cm，幅21.2cm，厚さ20.5cmを測る。笠が高く，反りはなだらかに下がる。いずれも一部破損しているが，およその原型をとどめている。

4は地輪であり，境内入口右に置かれている。高さ21.0cm，幅25.0cm，厚さ24.2cmを測り，正方形に近い形をしている。

いずれも梵字や紀年などの刻字は認められない。

(37) 日宮神社(ひのみやじんじゃ)付近の石造物 (図版9の37) 十二町津野地内

前述した住吉神社の北東約900m，小高い丘陵を挟み，荒館B遺跡の北東に位置する。今回の調査で，この神社付近に置かれている墓碑1個体と五輪塔の残欠4個体，および宝篋印塔2個体を確認，実測した(図版5の5～13)。

5は墓碑であり，高さ54.6cm，最大幅20.8cm，厚さ15.8cmを測る。石材は凝灰岩を用いている。

6は地輪であり，墓碑の直前に置かれている。高さ20.0cm，幅25.4cm，厚さ23.5cmを測り，下部は摩滅している。石材は凝灰岩を用いている。

7は地輪であり，高さ18.0cm，幅25.0cmを測り，厚さは不明である。一部破損しているが屋根は高く，軒は下方で反っている。石材は凝灰岩を用いている。

8は水輪であり，高さ18.3cm，幅28.2cm，上端幅15.8cm，下端幅15.0cmを測り，胴部は緩やかに弧を描くが，張りは強い。石材は凝灰岩を用いている。

9は宝篋印塔の台座であり，7･8の五輪塔基部に転用されている。残高19.0cm，幅27.1cm，厚さ27.6cmを測り，上面に4単位の複弁蓮華紋を施す。石材は凝灰岩を用いている。いずれも刻字，刻印は認められない。

10は水輪であり，高さ22.4cm，幅33.2cm，上端幅は19.4cm，下端幅19.6cmを測り，胴部は張りが強い。三字の梵字が刻字されており，そのうちの一字を図示した。石材は凝灰岩を用いている。

11は宝篋印塔の台座であり，10の五輪塔基部に転用されている。高さ23.3cm，幅26.8cm，奥行26.6cmを測る。格狭間に紋様を刻む。石材は硬質の凝灰岩を用いている。

12は火輪であり，上部が一部破損しているがおよその原型はとどめている。残高16.0cm，幅23.0cmを測る。屋根が高く，軒は下方で反っている。石材は凝灰岩を用いている。

13は地輪であり，高さ25.4cm，幅31.8cm，厚さ30.2cmを測り，正方形に近い形をしている。いずれも刻字，刻印は認められない。 (大高政史)

(38)～(41) その他の遺跡 (図版9の38･39･40･41)

なお今回の調査では遺物を採集できなかったが，西井龍儀･林寺巌州氏が本調査地区内で4遺跡を発見している。38は十二町ガメ山古墳群，39は坂津B遺跡(弥生時代～古墳時代)，40は十二町島崎遺跡(弥生時代～古墳時代)，41は島崎城跡(中世)である。 (大野 究)

2　遺物の散布状態　(第6～10図)

1993年度の調査によって，A地区から878破片・口縁部3.57個体分の資料を採集した。これらは縄紋時代から近世に至るものであり，このうちある程度，年代を判定できた資料は，714破片，口縁部3.09個体である。

当地区は氷見市の東南部にあたり，旧潟の平野とその砂嘴として発達した砂丘，潟に面していた丘陵からなる場所である。近年全国的に砂嘴上の遺跡が注目されている。今回の調査は，従来ほとんど知られていなかった氷見市の潟を中心とした地域の状況を知るための貴重な資料になるものである。

今回の調査では，調査域に国土座標X＝138°59′55″，Y＝35°48′を原点とし，1kmを1単位として一辺500ｍの方眼を設定し，北東コーナーの座標を地区名とした。これは，遺跡を個々のものとして捉らえるのではなく，全体の動向をより客観的に認識するためのものである。

(1)　縄紋時代遺物の散布状態　(第6図)

縄紋時代の遺物は，土器20片，石器1点である。土器は小破片が多く，器種を同定できるものはほとんどないが，深鉢を4片確認できた。石器は石錘である。これらの資料を，14地区で採集した。

遺物のほとんどは調査区の北東部の砂丘上に集中している。この砂丘はかつての砂嘴であったところである。また(X＝-16.0，Y＝91.5)地区でも，遺物の集中がみられるが，この辺りは，かつて潟に面していた丘陵の裾部と考えられ場所であり，縄紋時代の遺跡は，かつてのラグーンに面していた砂嘴上あるいは丘陵裾部に多く立地しているといえる。

(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態　(第7図)

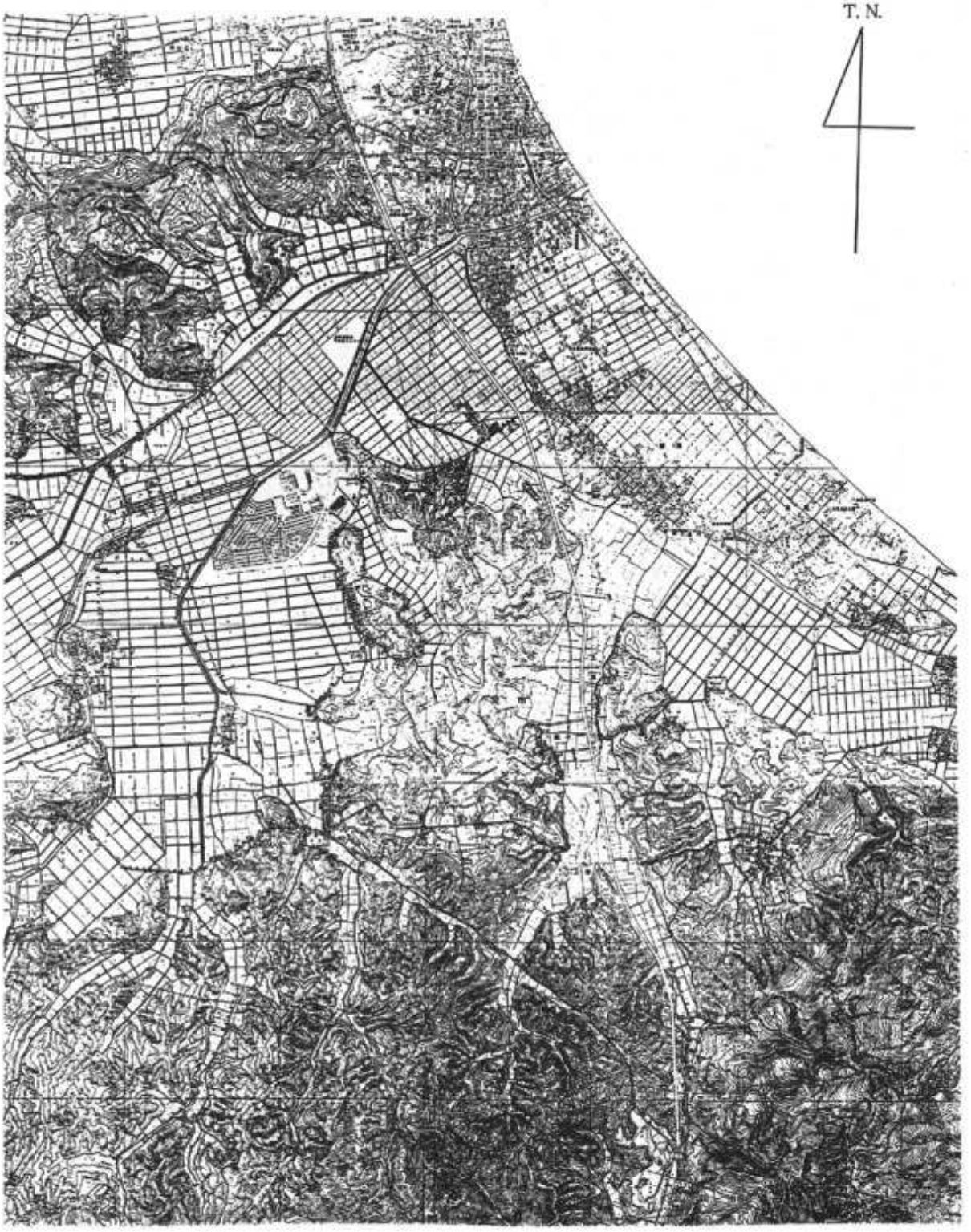
弥生・古墳時代の遺物は，弥生土器87片・0.09個体分，土師器10片である。これらの資料を11地区で採集した。

遺物は縄紋時代と同様，調査区の北東部の砂丘上に集中している。特に(X＝14.5･Y＝92.5)地区を中心に広がる柳田遺跡では38片，(X＝14.0･Y＝92.0)地区を中心とする島尾北遺跡では20片と比較的多くの遺物を採集できた。しかし縄紋時代とは異なり，丘陵部での散布はほとんど認められない。

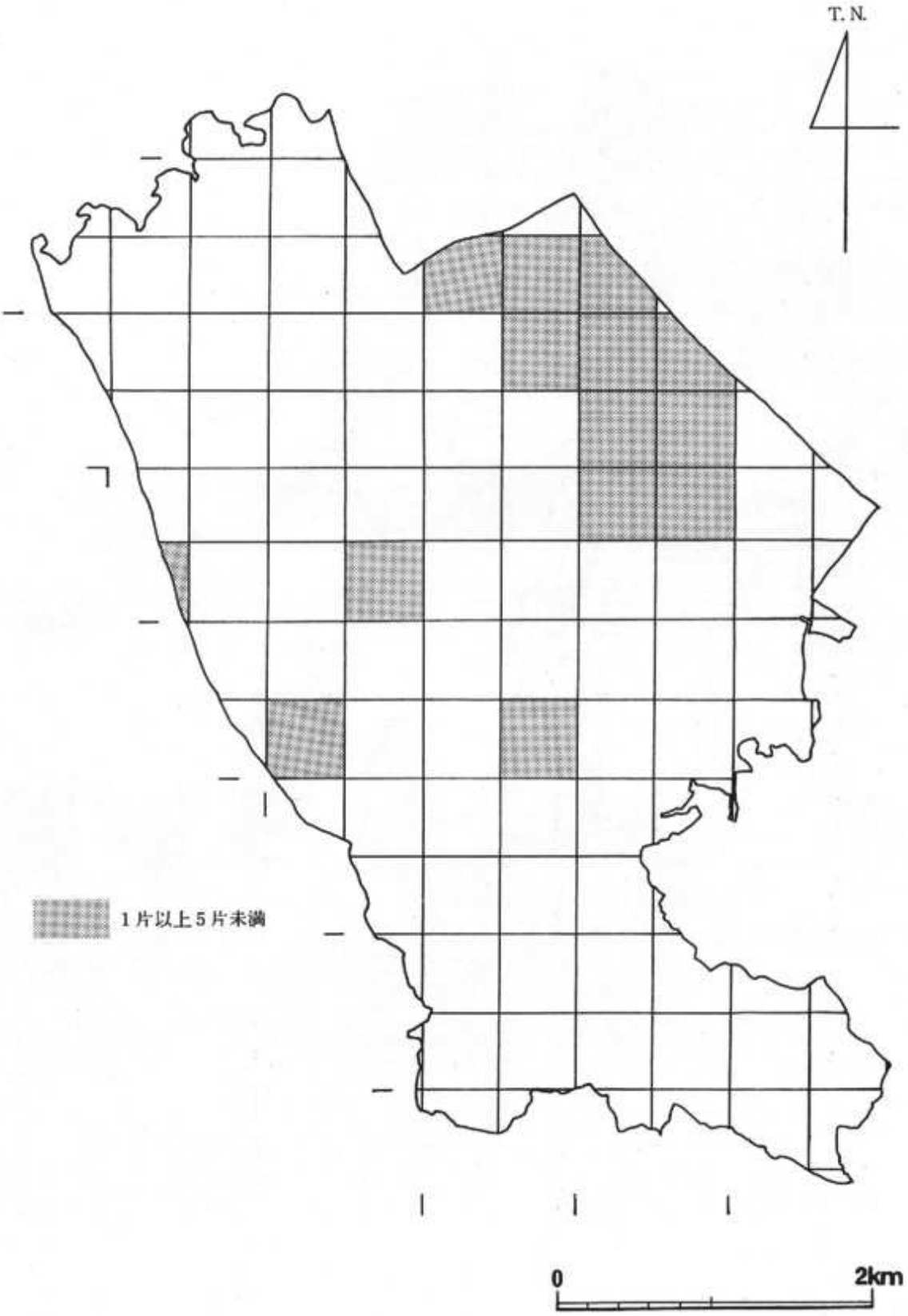
(3)　古代遺物の散布状態　(第8図)

古代の遺物は，須恵器96片・0.41個体分，土師器11片である。これらの資料を23地区で採集した。

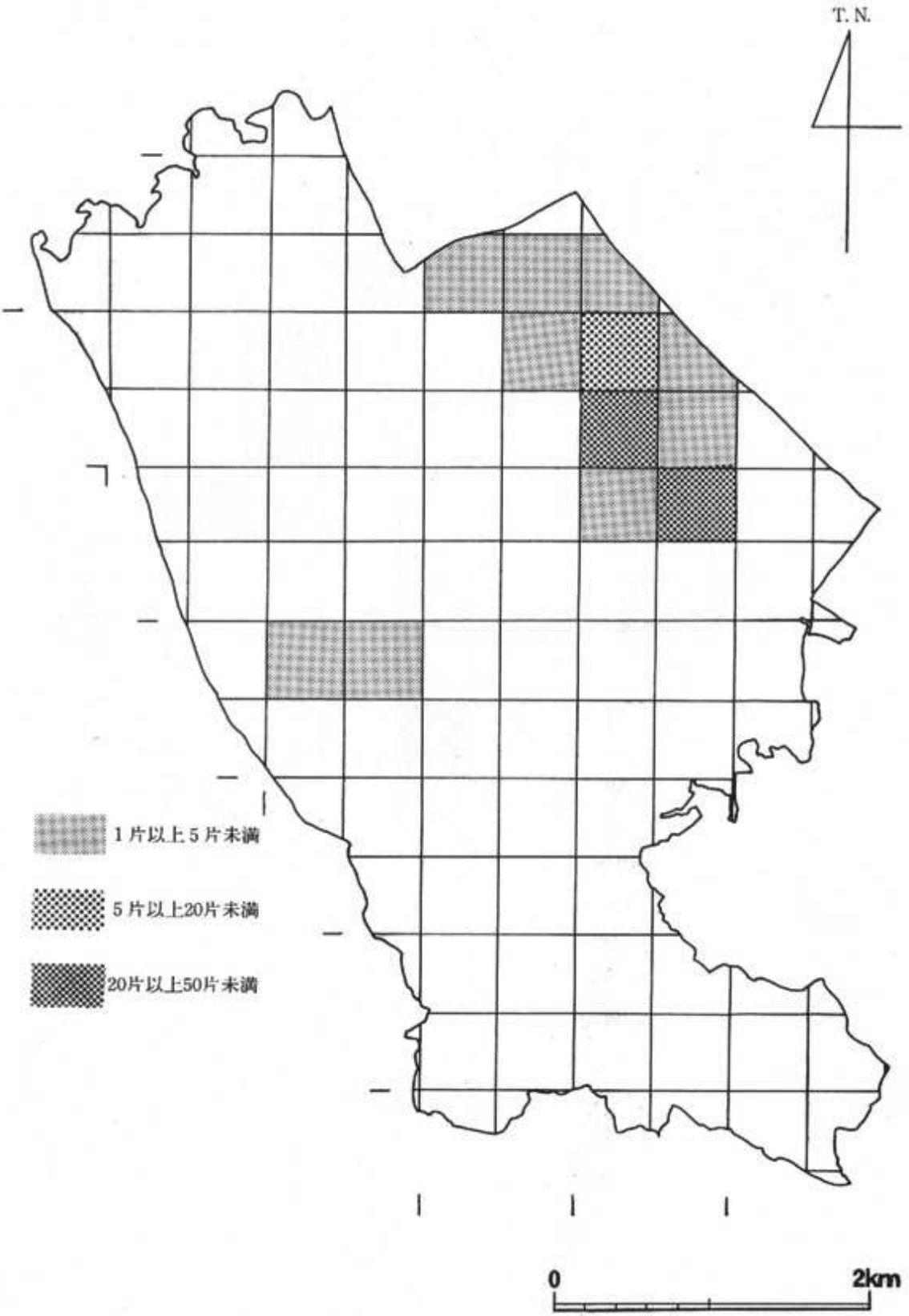
前時代までに比べ面的にも量的にも増加しており，調査区北東部の砂丘上だけでなく，丘陵部にも多くの遺物が散布する。丘陵部の散布状況をみてみると，(X＝15.5，Y＝90.5)地区を中心とする四十塚遺跡(標高約40ｍ)で19片と比較的多くの遺物を採集したが，この時期丘陵裾部に散在的に遺物が散布しているのがわかる。この丘陵裾部がかつての潟に面した場所であるこ



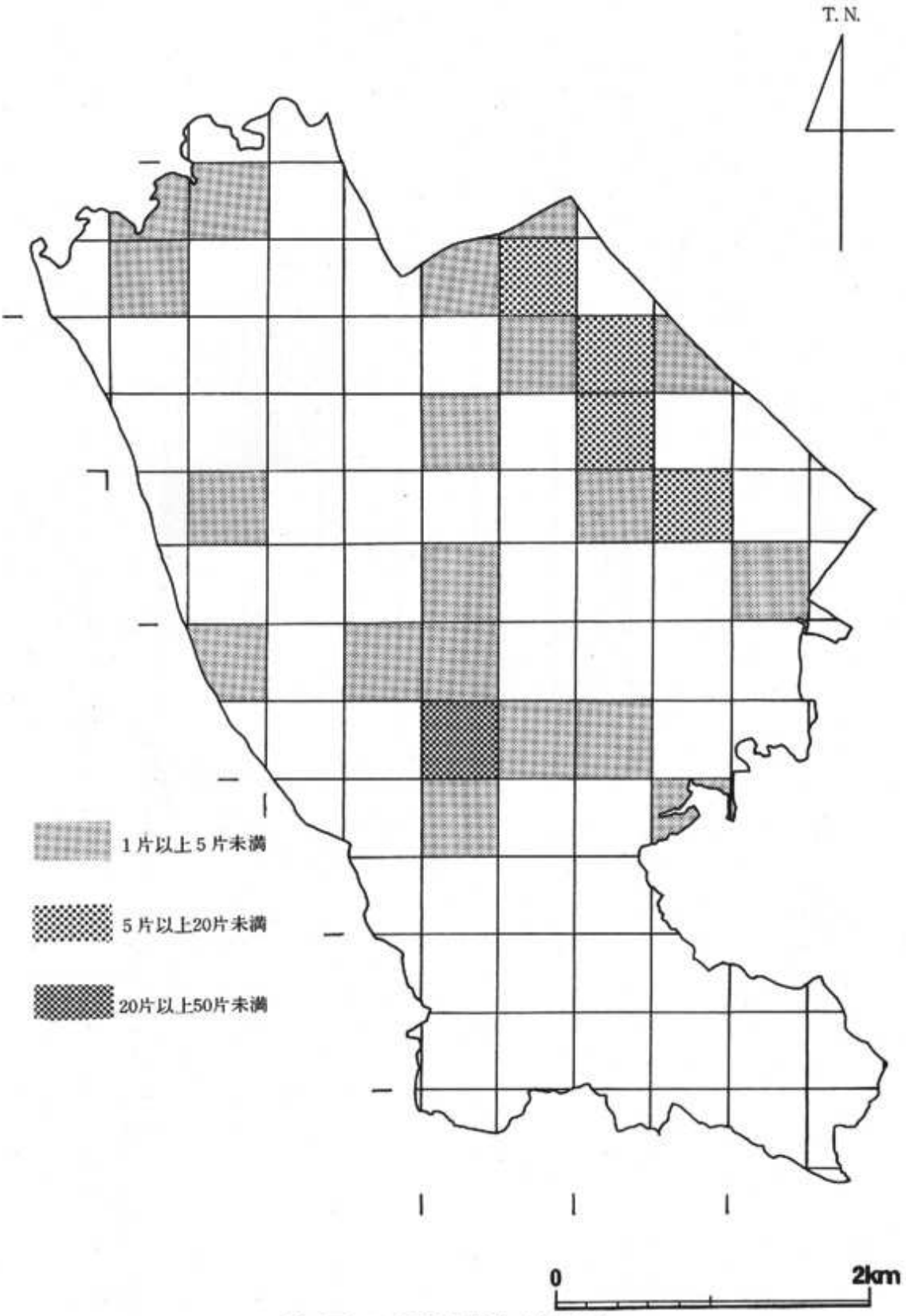
第5図　A地区図（縮尺1/40,000）



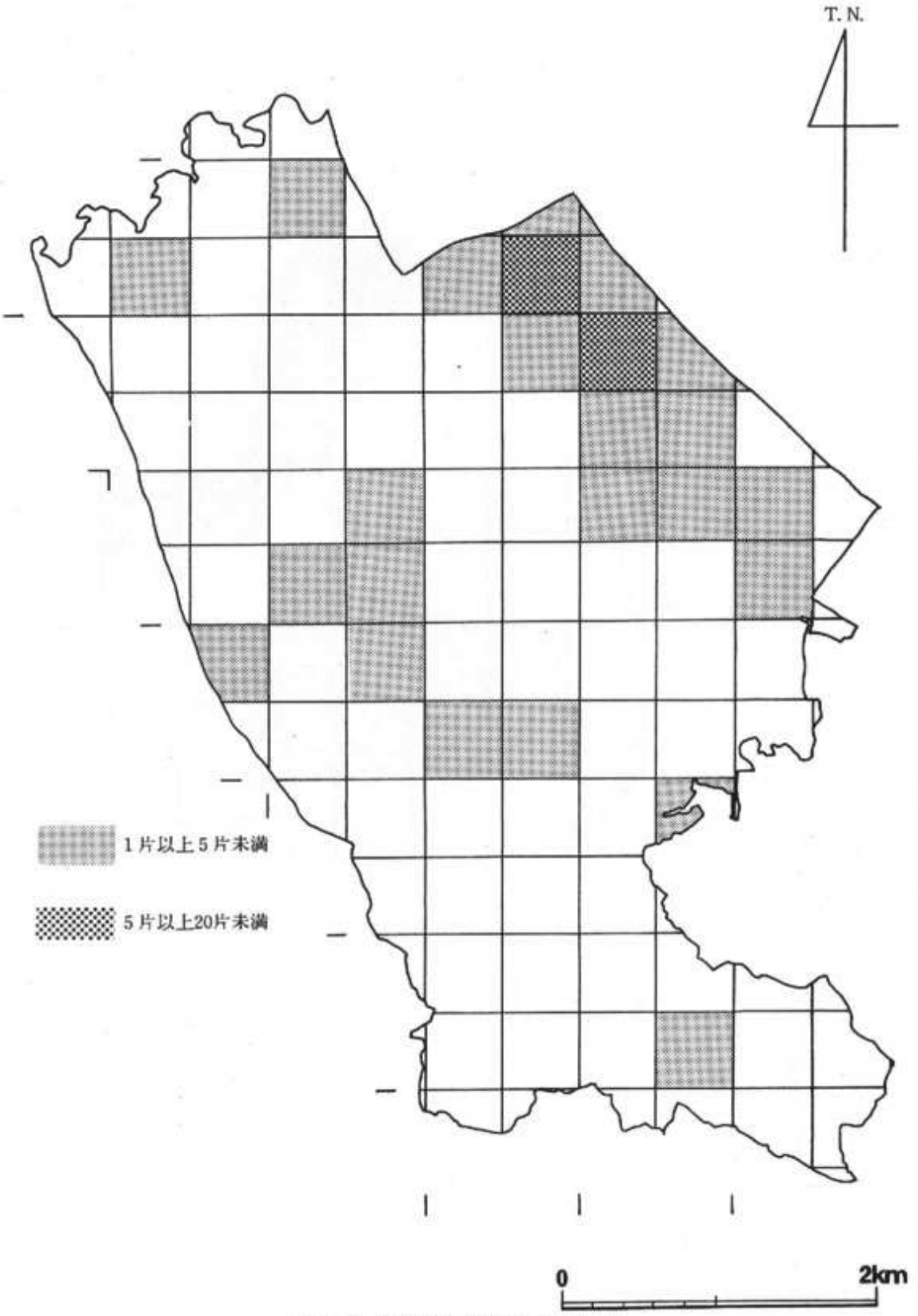
第6図　A地区縄紋時代遺物の散布状態



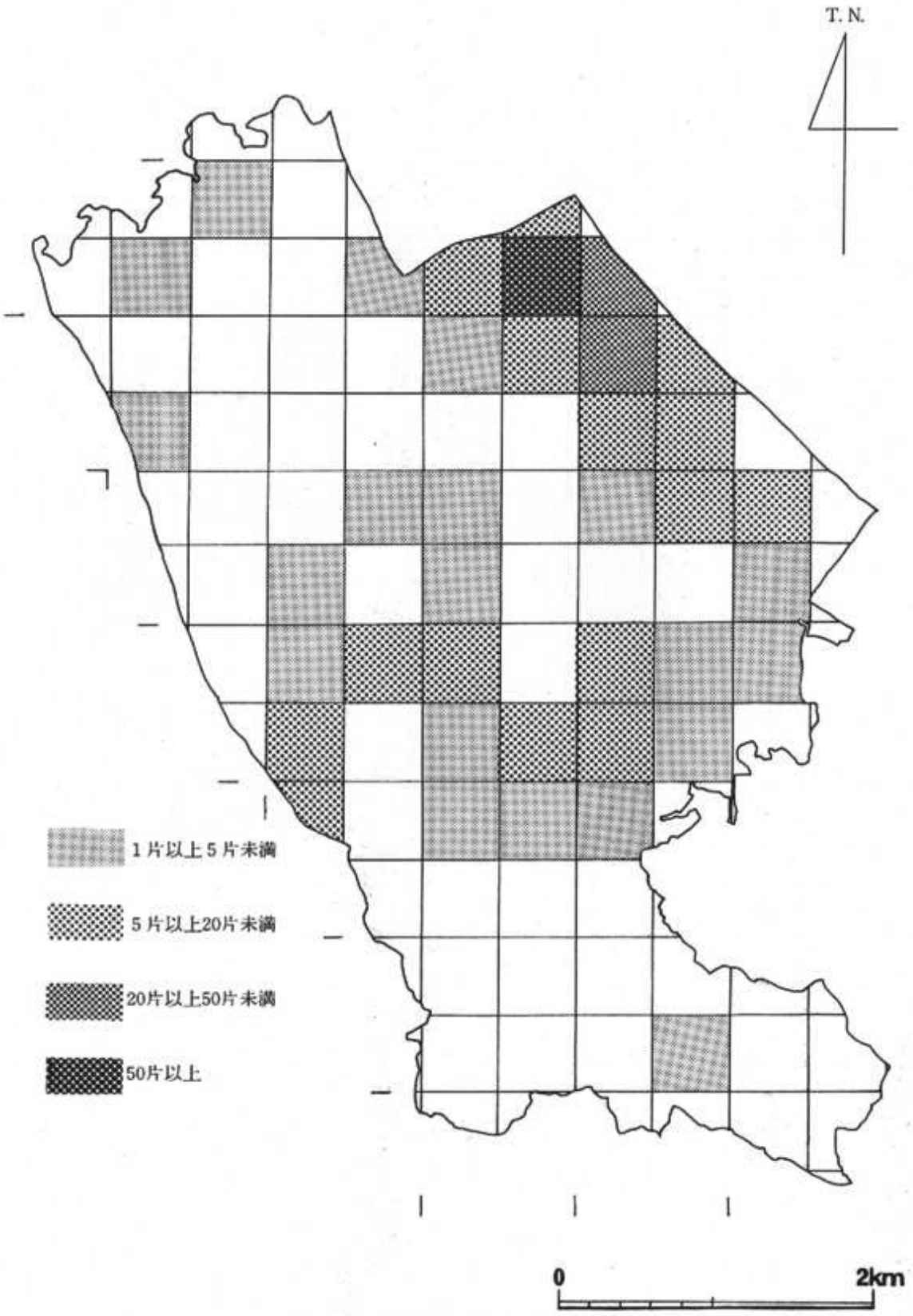
第7図　A地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第8図　A地区古代遺物の散布状態



第9図　A地区中世遺物の散布状態



第10図　A地区近世遺物の散布状態

とを考えるならば，このような散布状況は，潟の果たした役割を考える上でも重要なものであろう。

(4) 中世遺物の散布状態 （第9図）

中世の遺物は，珠洲28片・0.05個体分，土師器24片・0.31個体分，越前3片，瀬戸1片，青磁4片，瓦器1片である。これらの資料を26地区で採集した。

前時代までと同様，調査区の北東部に集中しており，(X＝14.5·Y＝93.0)地区を中心とした松田江北遺跡，(X＝15.0·Y＝93.5)を中心とした窪北遺跡で多くの遺物を採集した。またこの時期になると，調査区の南東部や北西部の丘陵上にも若干の散布がみられる。このような丘陵上の散布状況は，中世に入って丘陵上に城郭がつくられたり，山岳宗教が盛んになったりすることと関連するものであろう。しかし，古代に比べて，中世は遺物数，遺跡数ともに減少している。

(5) 近世遺物の散布状態 （第10図）

近世の遺物は，越中瀬戸131片・0.83個体分，近世陶器159片・0.77個体分，磁器15片・0.11個体分，伊万里89片・0.49個体分，土師器7片，瓷器系6片，唐津5片，瓦器4片，白磁1片，貨幣5点，鉄製品2点である。これらの資料を26地区で採集した。

前時代までと同様，調査区の北東部の砂丘上に集中する。近世に入ると，この砂丘上の遺物数は急増している。また砂丘上以外にも，調査区全域に広く散布しており，丘陵裾部や，丘陵と丘陵に挟まれた開析谷にも散布するようになる。かつての潟であった平野部においてまで散布がみられるのが，近世遺物の散布の特徴といえるであろう。

(6) 小 結

各時代の遺物の散布状態は以上に示したとおりであり，各時代によって散布状態に違いがあることが判った。

縄紋時代の遺物は，調査区北東部の砂丘上と内陸部の丘陵上で確認できた。丘陵上の散布は散在的である。砂丘上では遺物量はそれほど多くはないが，面的な広がりをもって確認できた。

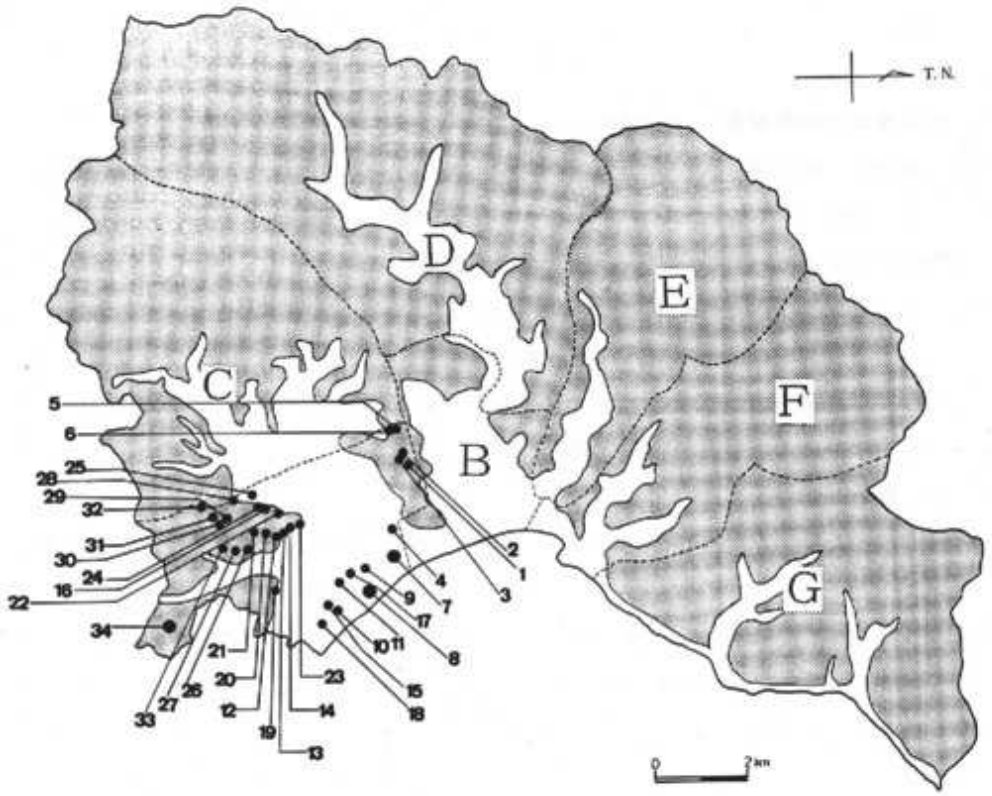
弥生・古墳時代の遺物は，丘陵上では減少し，それとは対照的に砂丘上では増加している。これは採集活動を中心とした生活から，稲作を中心とした生活への変化の結果であろう。

古代に入ると遺物量はかなり増加しており，面的にも広がりをもつ。この時代に入って丘陵，特にその裾部が開発の対象となったことが，その散布状態から考えられる。

中世の遺物は，若干散布量が減少しているが，比較的標高の高い丘陵上にも遺物が散布している。このような丘陵上では，今回遺物が採集できなかったところでも城跡等が確認されており，中世に入ってさらに高位に遺跡が営まれるようになったと考えられる。遺物量の減少は，集落の集村化によるものとも考えられるが，中世には漆器・鉄鍋類が普及するため，今後の調査を待って検討したい。

近世に入ると遺物量は急増し，散布地もさらに広がる。また，それ以前の時代ではほとんど

遺物の散布が確認できなかった平野部でも散布するようになる。このように広範囲に散布することが，近世遺物の散布の特徴といえるであろう。　（鈴木和子）



第11図　A地区の遺跡の位置（図版９～14参照）

第3章　おわりに

氷見市は，海と山に恵まれた地勢である。富山湾の豊かな海産物と天然の良港によって，今でも富山県を代表する漁港として賑わっている。日本で最初に調査された洞窟遺跡である大境洞窟や縄紋時代前期後葉の標識遺跡である朝日貝塚も，海の幸によって繁栄したものであり，古代には大伴家持が潟湖（布勢水海）を歌に詠んだ。他方，山には石動山を初めとする山岳宗教の活動があり，多くの寺社の地名や伝承を残している。また武家の築城の舞台ともなった。そして氷見市域は，加越能（加賀・越中・能登）の海陸の交通の要衝に当たり，政治・経済・軍事にわたる重要な意味をもっていたであろう。平野面積に比して，かなり密度の高い遺跡が営まれたのは，このような自然・歴史的背景からであろう。

遺跡詳細分布調査は，これら遺跡の実態をより詳しく把握し，その保護と活用の道を開くためのものであるが，同時に地域の歴史を考える資料を得ることも意図してこれを実施した。

1993年度のA地区分布調査によって，878片・口縁部3.57個体分の遺物を採集した。この地区においては，従来24遺跡が知られていたが，今回の分布調査の結果，16遺跡を確認し40遺跡となった。また6遺跡について，従来認定されていた遺跡の範囲を変更した。

今年度の調査区を地形によって大きく分けると，(a)砂嘴の発達した砂丘，(b)旧潟に面していた丘陵，(c)旧潟の平野の3地域となる。

調査区の中で最も継続的に利用されているのは，(a)砂丘地区である。縄紋時代から近世に至る，多くの遺物が散布しており，遺跡数も9遺跡を数える。それぞれの遺跡についてみても，長期にわたる遺跡が多く，松田江北遺跡や柳田遺跡に代表されるように，縄紋時代から近世まで続くと考えられる遺跡が6遺跡を数える。弥生・古墳時代から近世まで続く遺跡を含めるなら，この地区に所在するほとんどの遺跡が，長期継続型の遺跡であると言えるであろう。遺物量は各遺跡によって多少異なるが，中世の遺物が若干減少するものの，時代が降るにつれて漸増しており，近世に入って急増する。おそらく漁業・農業・海運を営む上で有利な条件をもつ海岸の砂丘は，各時代を通じて当地区の営みの中心地になっていたのであろう。

これに対して(b)丘陵地区では，縄紋時代の遺物を，かつては潟湖に面したであろう丘陵裾において採集したが，その量は少ない。山林の分布調査は今後の課題であるが，海辺・水辺より遺跡は少ないようである。また弥生・古墳時代の遺物はほとんど採集できなかった。古墳時代には丘陵に園カンデ窯跡のような窯跡や古墳が立地しており，遺跡は皆無ではない。ただし生活の場として，丘陵とその開析谷が本格的に利用され，遺跡が営まれるのは古代に入ってからであろう。遺物の散布は七世紀以後に増加が顕著となる。その散布状況をみると，比較的標高が低く，平野部に張り出すような丘陵の裾部に多くの遺物が散布している。このような場所

は，旧潟に面していたものである。中世には遺物量はやや減少するが，谷奥や丘陵の各地区に置いてかなり広範に散布するようになる。中世には大量の漆器・鉄器を使用していたため，採集量の減少より，散布地域の拡大を重視する方がよいであろう。近世に入ると散布密度・量の増加が著しい。

（c）平野地区は，現在は豊かな水田地帯であるが，十二町潟干拓工事以前には，潟湖であった地区が大部分を占める。そのためか採集遺物量は極めて少ない。中世の遺物も若干採集したが，そのほとんどは近世以後のものである。これら採集資料のかなりは，干拓に伴う二次的なものであろうが，丘陵裾部は遺跡の集中地帯であり，それに近接する地区では遺跡の有無を注意する必要があるであろう。また縄紋遺跡等が地下深くに埋れている可能性もある。これらは，遺物の採集調査で確認することは難しく，工事等に際して注意していく必要があろう。

以上，調査区を地形によって区分して，それぞれの地区における遺物散布・遺跡の特徴を概観した。とりわけ今回の調査の成果として，従来は充分に判っていなかった海岸砂丘地区について，かなりの知見を得られたことをあげることができる。この地区においては，詳しい時期は特定できないが，縄紋時代から近世・近代にかけて，かなり継続的な営みがなされていた。今後，その遺跡の実態が判ってくれば，地域の歴史だけではなく日本海域の遺跡を考える上でも，大きな意味をもつであろう。丘陵においては，若干の縄紋土器の散布があるが，弥生時代の遺物は乏しい。古墳時代には，窯業や古墳を営む場となったが，それは富山県下においても特筆できる意義をもつものを含んでいる。古代から近世にかけては，生活の場としての開発が進行したようであるが，山岳宗教や城館のように特別な意味をもつものを含んでいたであろう。平野部は，上記2地区の営みをつなぐ潟湖であったが，近世から近代にかけての頃にかけて干拓が進んで水田化し，現代の景観が成立した。　（鈴木和子・前川 要・宇野隆夫・大野 究）

参考文献

1　富山大学人文学部考古学研究室『珠洲大畠窯』1993年。

2　富山県立氷見高等学校歴史クラブ『富山県氷見地方 考古学遺跡と遺物』氷高歴史クラブ報告書№11，1964年。

3　楢崎彰一・田中照久「越前編年表」『北陸における越前陶の諸問題―第2回北陸中世土器研究会資料―』北陸中世土器研究会，1989年。

4　西井龍儀・林寺巌州・大野究「氷見市園カンデ窯跡」『大境』12号，富山考古学会，1988年。

5　西井龍儀「越中における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号，北陸古代土器研究会，1991年。

6　林寺巌州「守山城郭群とその採集遺物」『大境』第14号，1992年。

7　氷見市教育委員会『富山県氷見市堀田西谷内遺跡試掘調査報告書』1988年。

8　氷見市教育委員会『氷見市遺跡地図［第2版］』氷見市埋蔵文化財調査報告第14冊，1993年。

9　北陸中世土器研究会『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』1992年。

10　松島洋「氷見十二町潟低湿地の断面露頭」『富山教育』709号，1981年。

11　湊 晨「四十塚遺跡」『富山県史』考古編，1972年。

12　安田喜憲「花粉分析から見た富山湾沿岸の縄紋前期の遺跡」『小泉遺跡』大門町教育委員会，1982年。

13　山本正敏・大野究「氷見市十二町排水機場の資料」『大境』12号，富山考古学会，1988年。

14　吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕』六興出版，1989年。

15　吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館，1994年。

図　　版

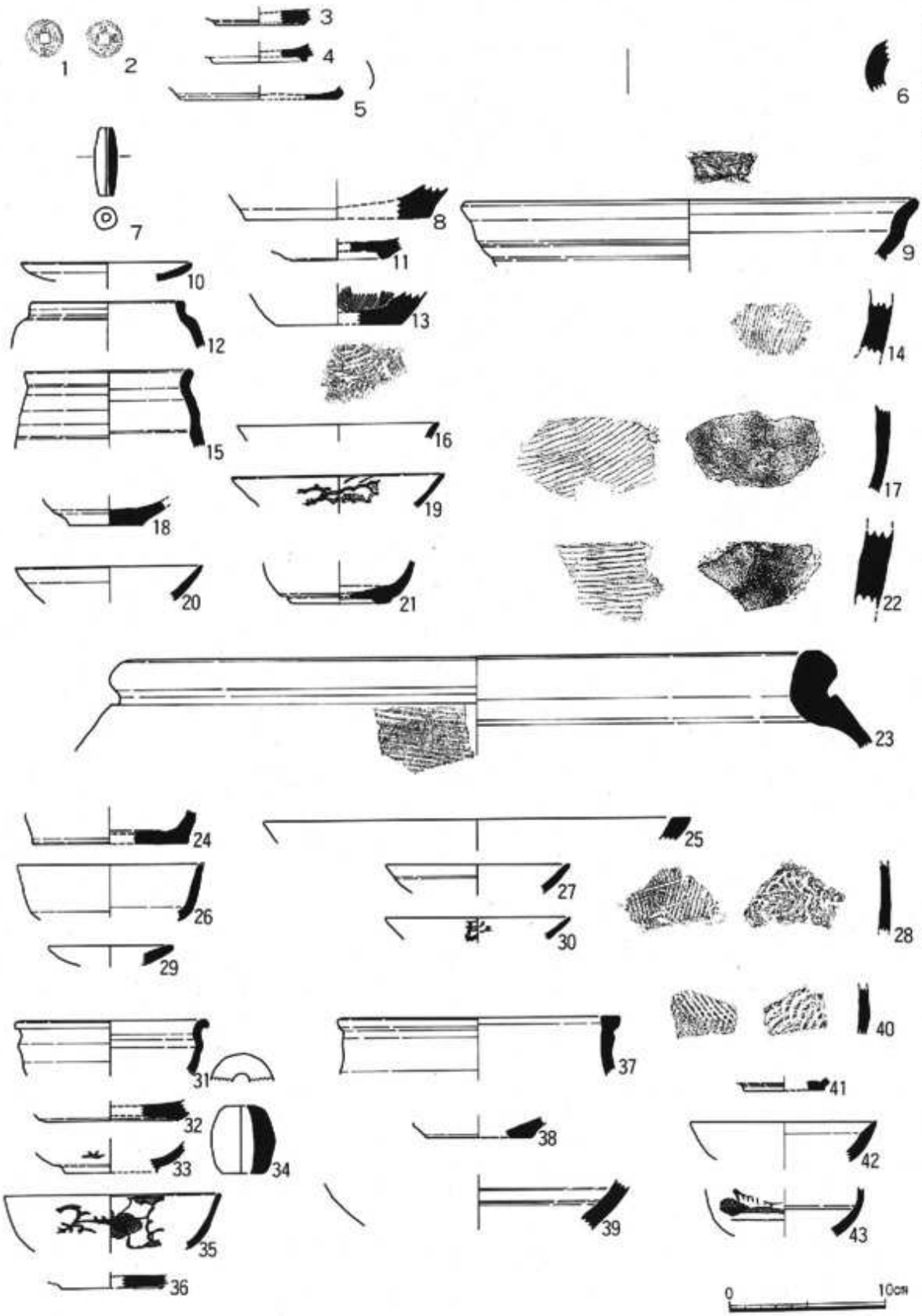
図版一　A地区航空写真（一）

1947年撮影（縮尺 1/26,000）

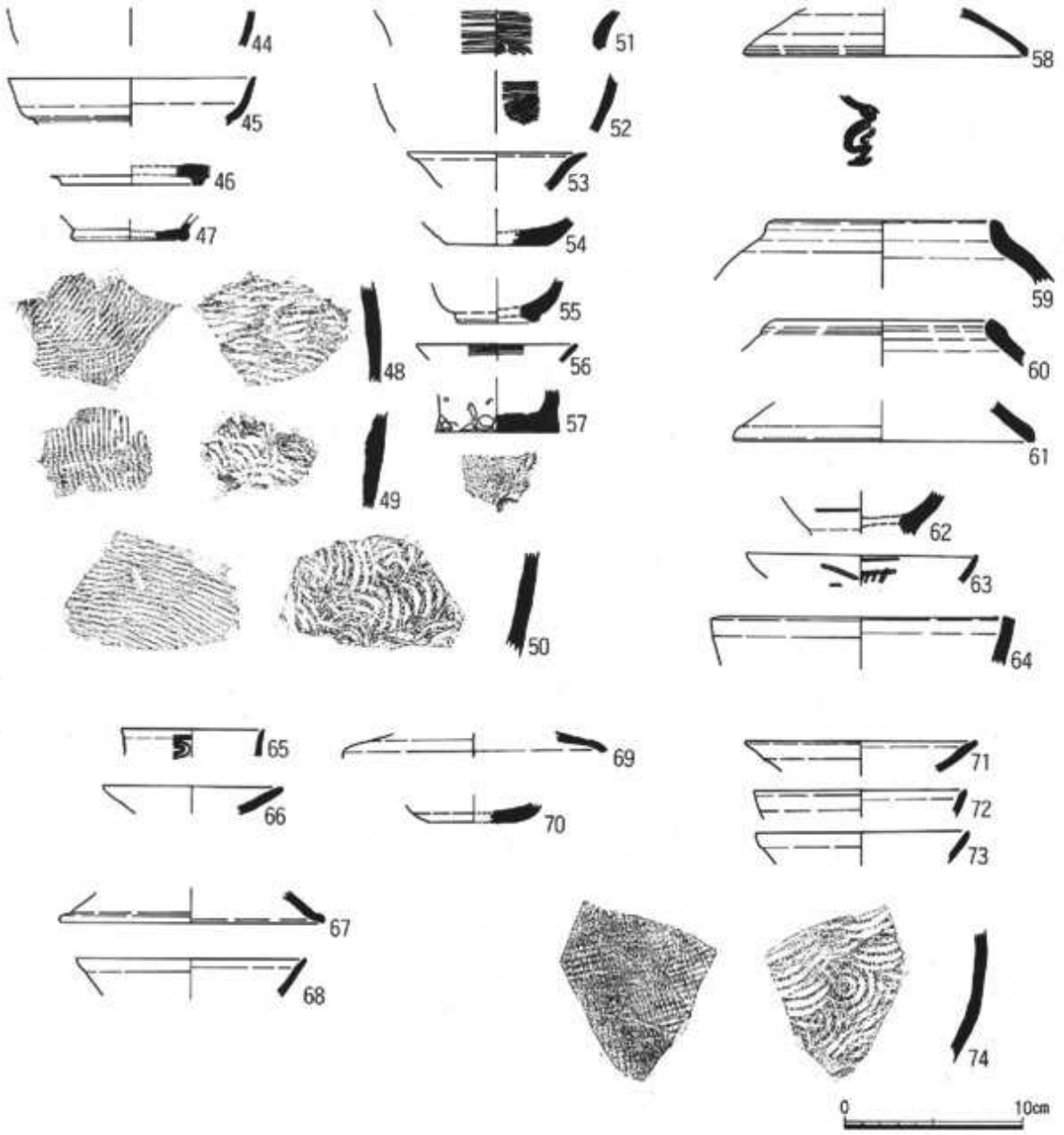
図版二　A地区航空写真(二)

1992年撮影（縮尺 1/26,000）

図版三　遺物実測図（一）

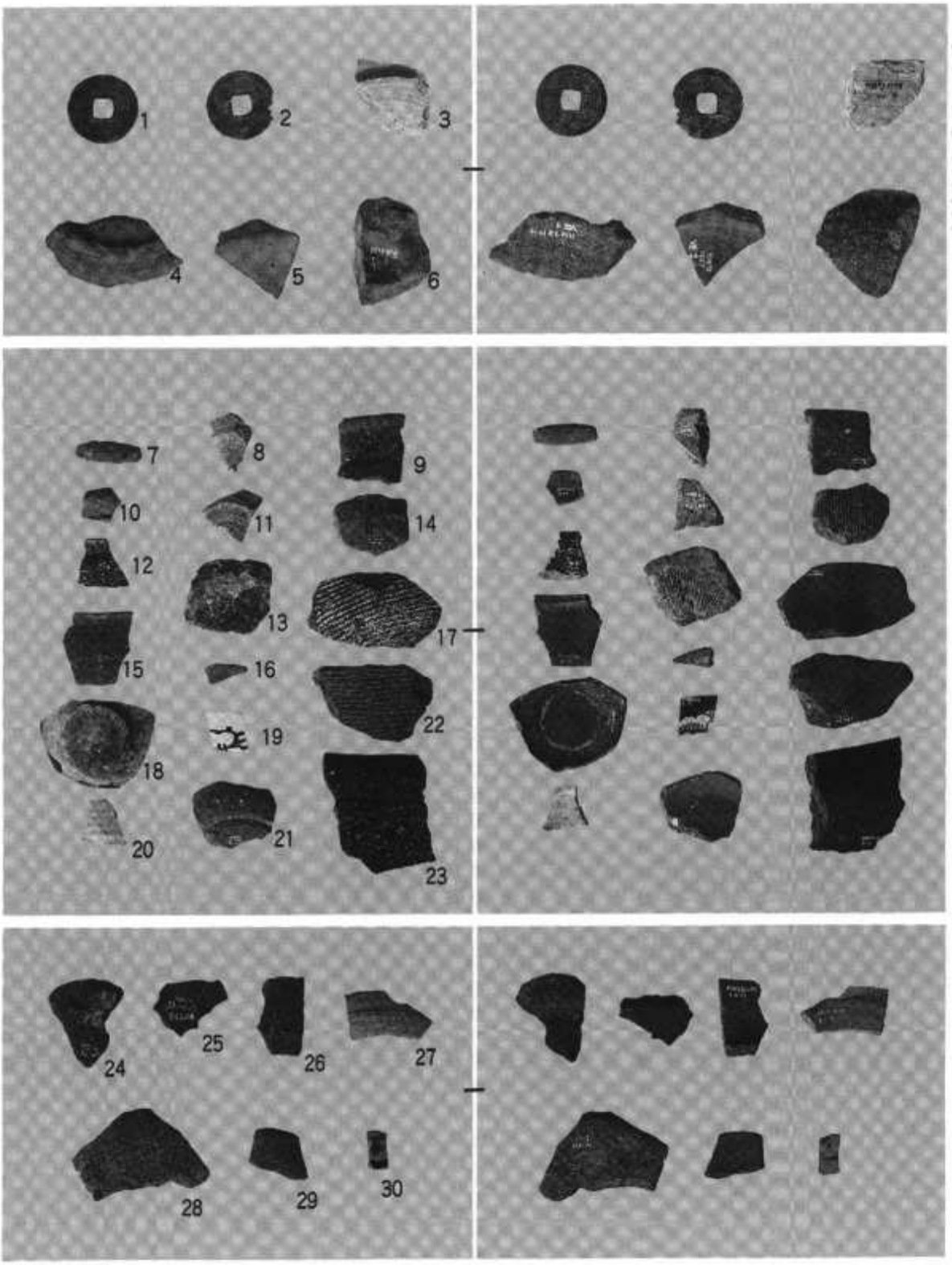


1～2荒館B遺跡，3～6十二町潟排水機場遺跡，7～23窯北遺跡，24～30松田江北遺跡，31～34窯シムラ遺跡，35～36柳田南遺跡，37～39柳田布尾山遺跡，40～43堀田サカイ遺跡（縮尺 1/4）

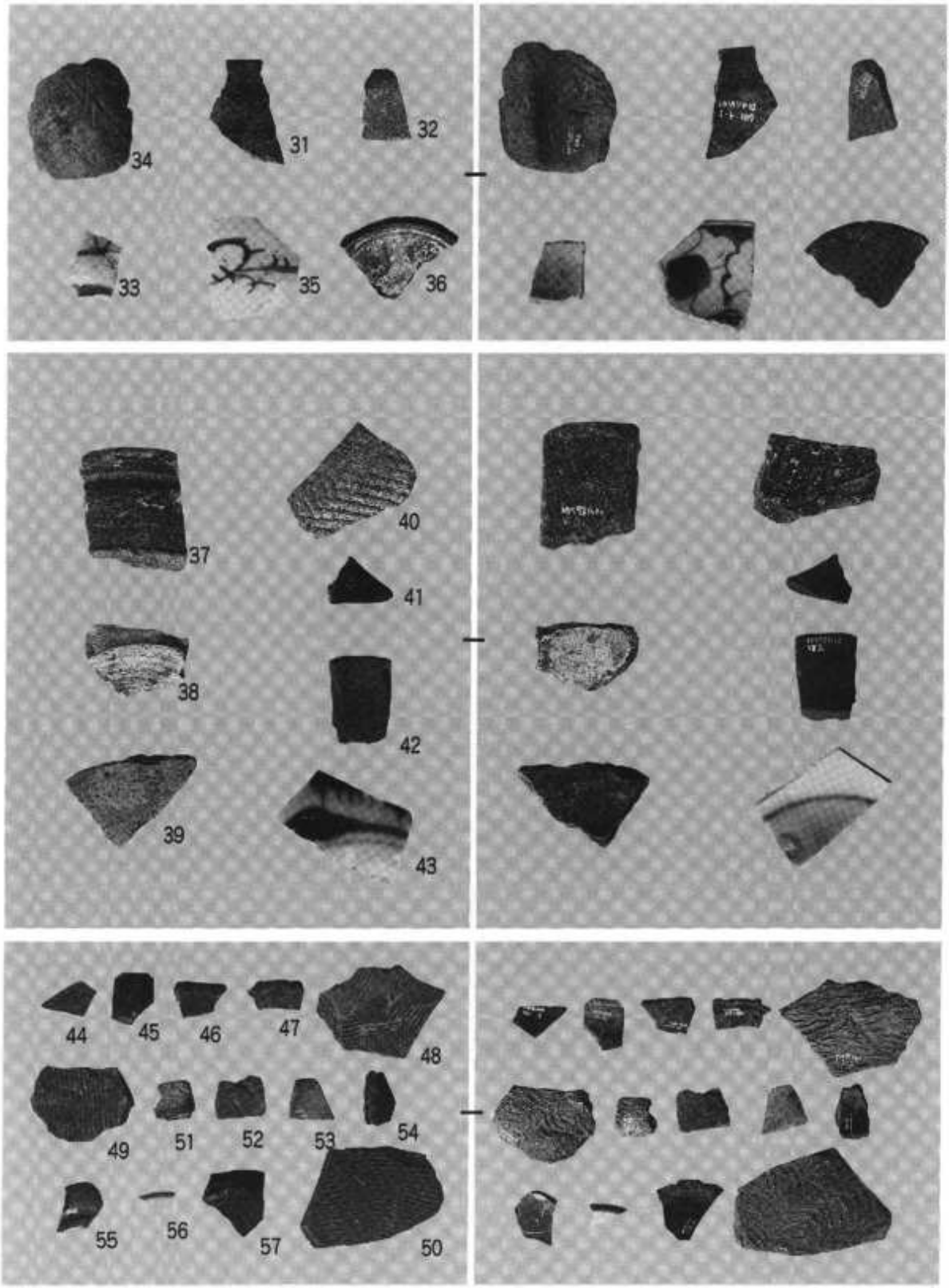


44～57柳田遺跡，58～61島尾遺跡，62～64大浦遺跡，65・66堀田竹端遺跡，67・68四十塚遺跡，69・70田子遺跡，71～74遺跡範囲外採集品（縮尺 1/4）

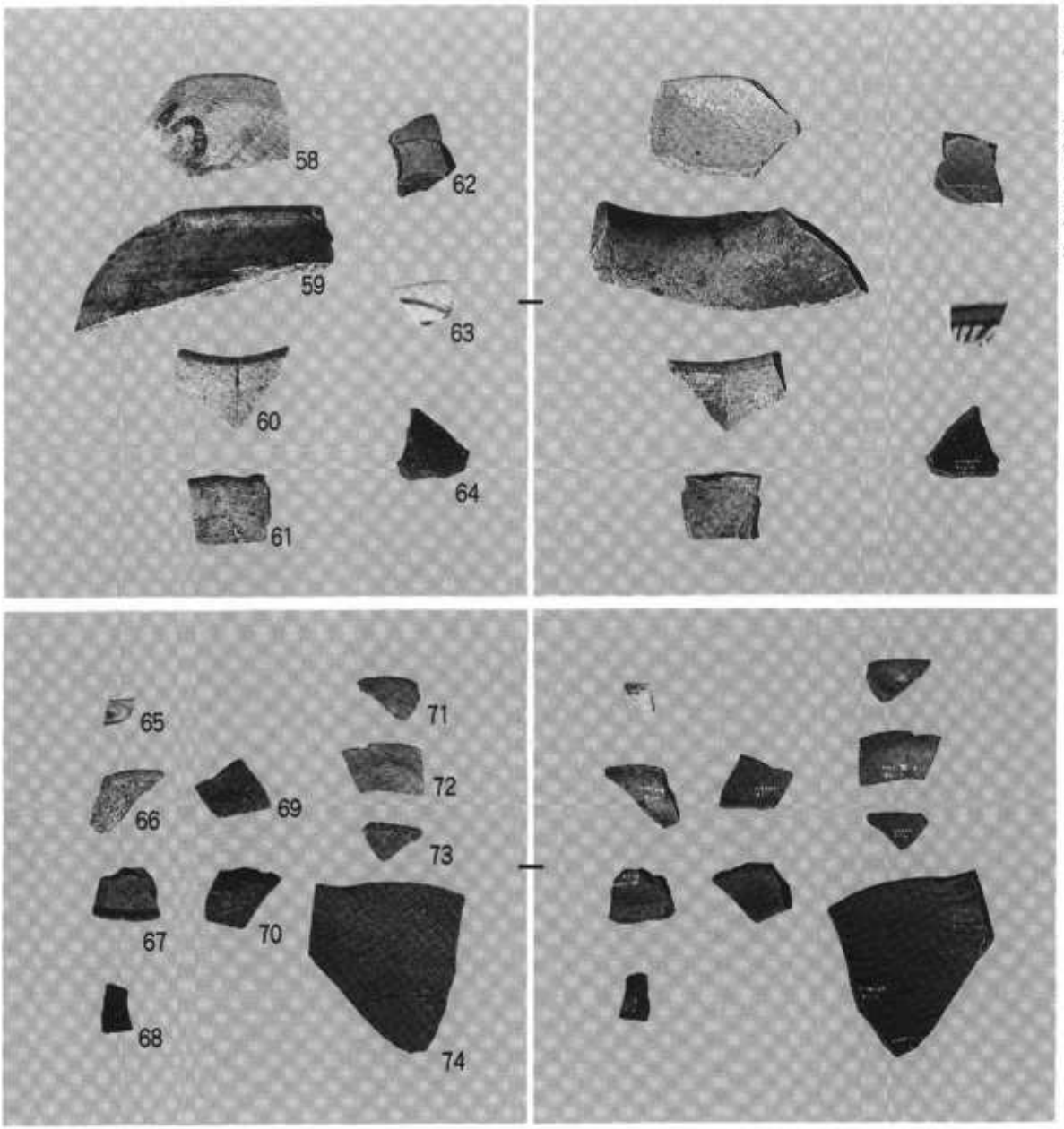
1～4 住吉神社境内，5～13日宮神社付近（縮尺 1/8）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
14
12
13
17
15
16
22
18
19
20
21
23
24
25
26
27
28
29
30

（図版3 参照）


34
31
32
33
35
36
37
40
41
38
42
39
43
44
45
46
47
48
49
51
52
53
54
55
56
57
50

(図版3・4 参照)



(図版4 参照)

図版九　A地区の遺跡と遺物採集地点(1)

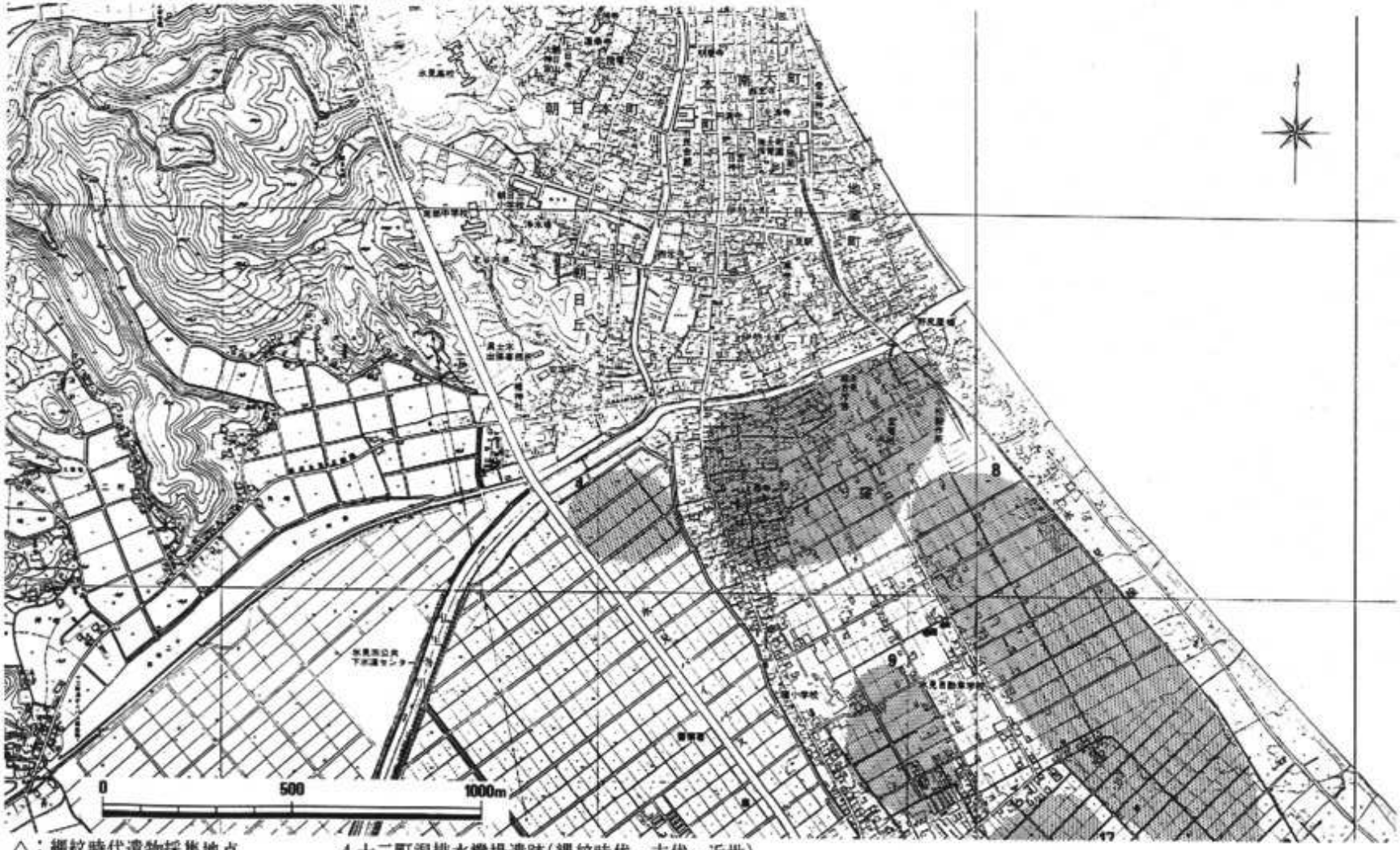
△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

1 十二町津野遺跡(古代～近世)
2 荒館ソモギ遺跡(中世)
3 荒館B遺跡(縄紋時代・中世～近世)
5 坂津遺跡(古墳・中世)
6 坂津横穴群(古墳時代)

36住吉神社境内(石造物)
37日宮神社付近(石造物)
38十二町ガメ山古墳群(古墳時代)
39坂津B遺跡(弥生時代～古墳時代)
40十二町島崎遺跡(弥生時代～古墳時代)

41島崎城跡(中世)

図版一〇　A地区の遺跡と遺物採集地点(II)



△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

4 十二町潟排水機場遺跡(縄紋時代・古代～近世)
7 窪北遺跡(弥生時代・古代・近世)
8 松田江北遺跡(縄紋～弥生時代・古代～近世)
9 窪シムラ遺跡(縄紋～弥生時代・古代～近世)
17柳田遺跡(縄紋時代・近世)

図版一一　A地区の遺跡と遺物採集地点(III)

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

8 松田江北遺跡(縄紋時代～近世)
10柳田南遺跡(古代～近世)
11柳田茨木遺跡(弥生時代～近世)
12柳田布尾山遺跡(縄紋時代～近世)
13柳田沖宮遺跡
14園長堤遺跡
15長尾北遺跡(縄紋時代～近世)
17柳田遺跡(弥生時代～近世)
18島尾遺跡(中世～近世)
19上泉遺跡(古墳～中世)
20上泉西遺跡(古代～近世)
21大浦深素遺跡(古代)
26四十塚遺跡(縄紋時代～近世)
27多胡城遺跡
33田子遺跡(古代～近世)

図版一二　A地区の遺跡と遺物採集地点(Ⅳ)

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

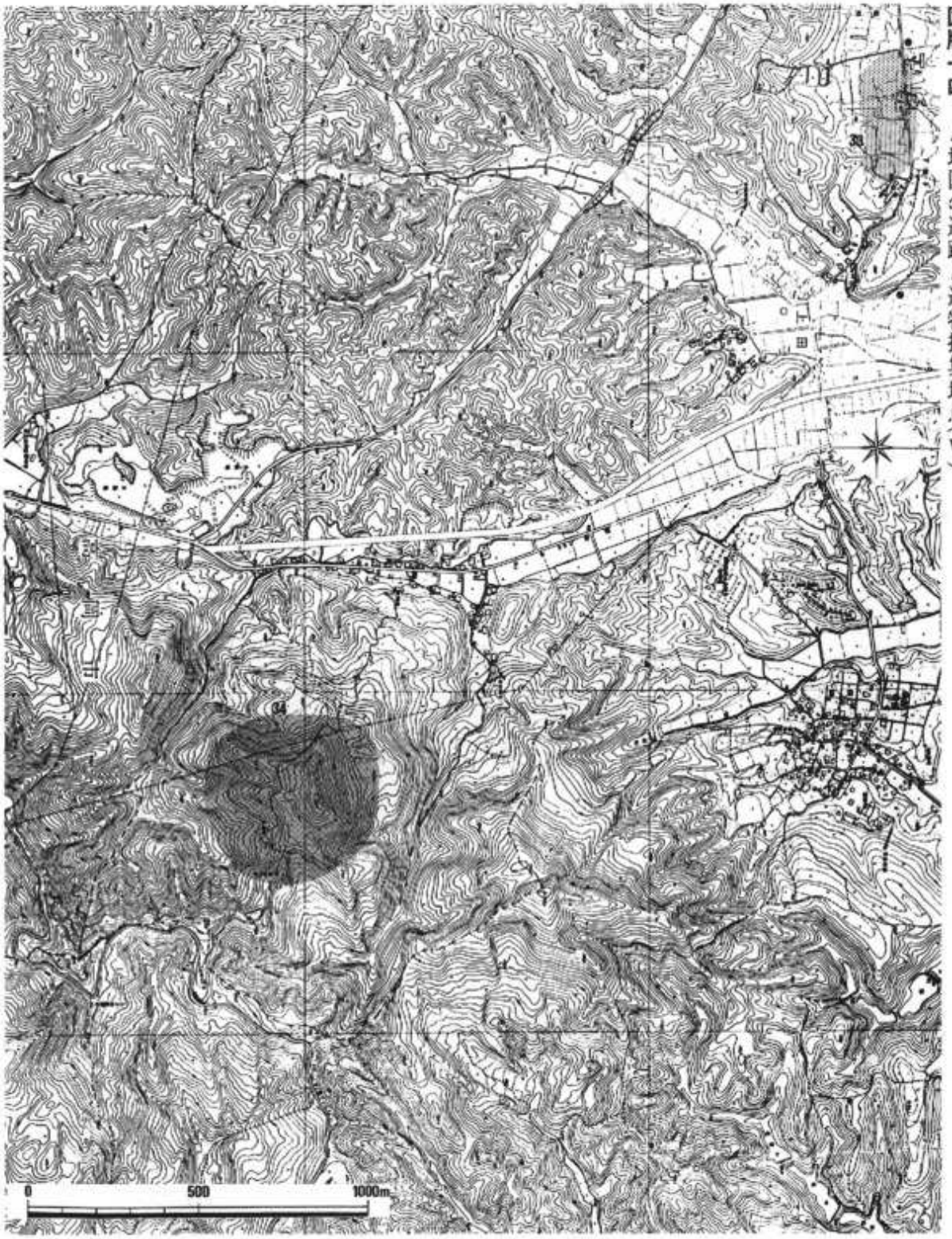
16堀田サカイ遺跡(弥生時代・古代～近世)
22馬乗山遺跡(古墳時代・近世)
23圏カンデ窯跡・製鉄遺跡(古墳時代)
24大浦遺跡(中世～近世)
25堀田竹端遺跡(近世)

図版一三　A地区の遺跡と遺物採集地点（V）

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

28堀田大久前遺跡（古墳時代～古代）
29堀田ナンマイダ松古墳（古墳時代）
30堀田東谷内遺跡
31堀田ガス山遺跡
32堀田館ノ山塚遺跡

図版一四　A地区の遺跡と遺物採集地点（Ⅵ）



△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

33田子遺跡（古代～近世）
34小竹山城跡（古代～中世）

1994年３月25日　印刷
1994年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ
氷見市埋蔵文化財調査報告書第16冊

編集・発行　氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

印　刷　株式会社　ア　ヤ　ト